原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第34集

原の辻遺跡

（はる　つじ）

主要地方道勝本石田線道路改良工事に伴う調査報告書④

2006

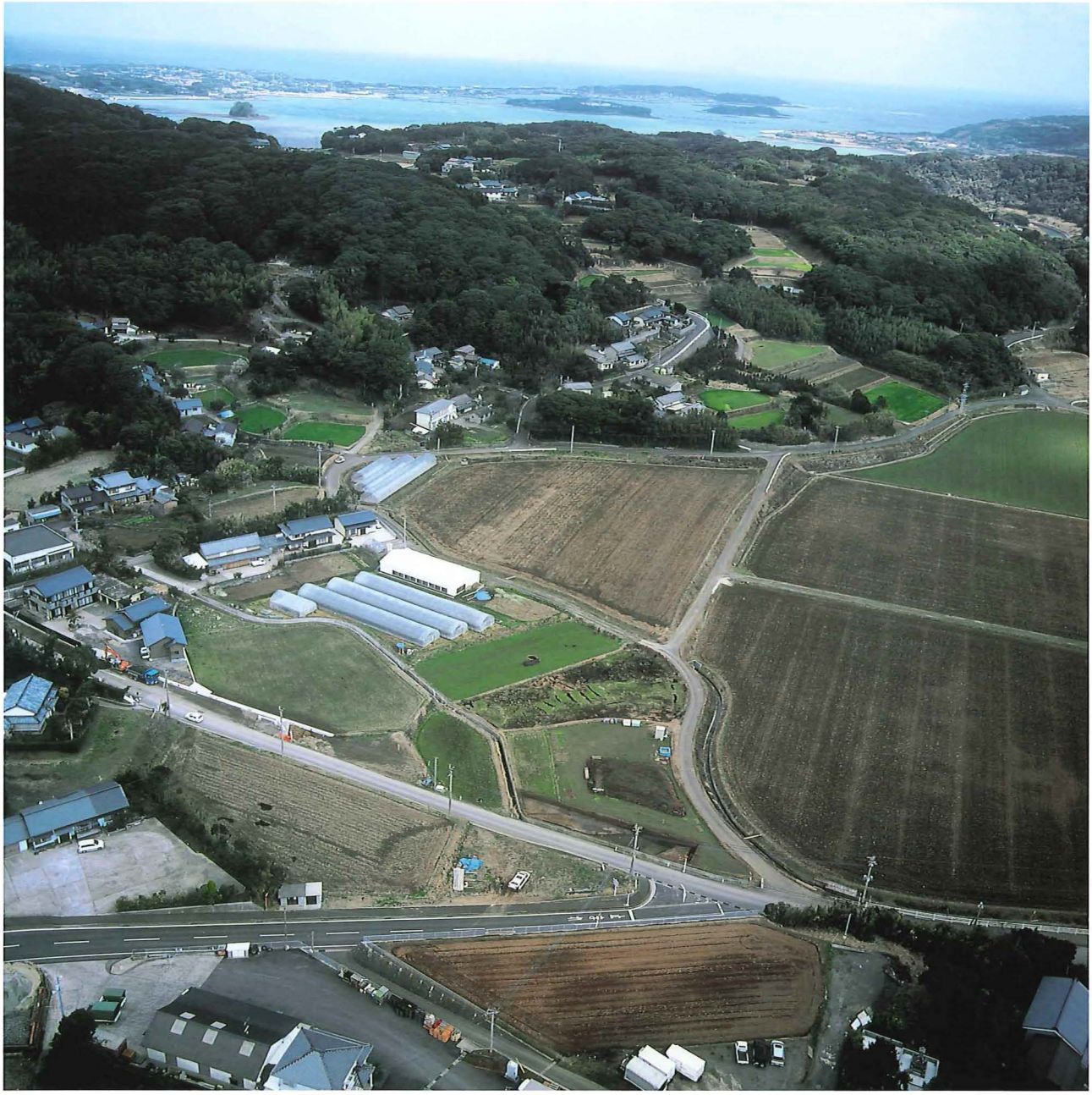
長崎県教育委員会

原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第34集

原の辻遺跡

はる　つじ

主要地方道勝本石田線道路改良工事に伴う調査報告書④



Pho 1　原の辻遺跡北部（西から　内海を望む）

発刊にあたって

本書は主要地方道勝本石田線道路改良工事に伴い実施した，原の辻遺跡の発掘調査報告書です。

原の辻遺跡は『魏志倭人伝』に記される「一支國」の王都として特定されています。弥生時代におけるクニの実体を解明できる希有の遺跡として，平成12年度に国特別史跡に指定された重要な遺跡です。

今回は遺跡北側の安国寺Ａ地区および遺跡南側の原ノ久保Ａ地区の調査を行いました。安国寺Ａ地区では平成６年度の緊急調査において大溝が確認されています。また原ノ久保Ａ地区では平成８年度の範囲確認調査において弥生時代後期後半から終末期にかけての「一支國」における有力集団の墓域が確認されています。

本年度の調査では，以上のような過去の調査成果を十分に考慮し，原ノ久保Ａ地区墓域の広がりや，遺跡北側における集落および河川の様相解明を念頭においた調査を実施しました。

最後に，調査に際して多くの方々にご協力頂いたことに深謝するとともに，本報告書が研究の一助になれば幸いです。

2006年９月１日

長崎県教育委員会教育長　横　田　修一郎

例　　言

1．本書は，主要地方道勝本石田線道路改良工事に伴って平成17年度に実施した原の辻遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2．本書は，平成18年度主要地方道勝本石田線道路改良工事に伴う緊急発掘調査の予算にもとづいて発行した。

3．本書に収録した遺跡の調査地は長崎県壱岐市芦辺町深江栄触および石田町石田西触に所在する。

4．本事業は長崎県壱岐地方局建設部建設課道路班が主体となり，調査主体は長崎県教育委員会が，調査担当は原の辻遺跡調査事務所が行った。

5．調査組織は下記の通りである。

(1)　平成17年度

原の辻遺跡調査事務所	所長	安楽　勉	
	係長	村川　逸朗	
	係長	森崎　伸一	
	主任文化財保護主事	福田　一志	※調査担当（現県教委学芸文化課）
	文化財保護主事	寺田　正剛	
	文化財保護主事	林　隆広	※調査担当
	文化財保護主事	溝上　貴稔	

(1)　平成18年度

原の辻遺跡調査事務所	所長	安楽　勉	
	係長	村川　逸朗	
	係長	森崎　伸一	
	文化財保護主事	川畑　敏則	
	文化財保護主事	寺田　正剛	
	文化財保護主事	林　隆広	※報告担当
	文化財保護主事	溝上　貴稔	

6．本書に収録した遺物の実測・製図は原の辻遺跡調査事務所が行った。

7．本書収録の遺物・図面・写真類は原の辻遺跡調査事務所で保管している。

8．平面直角座標は旧日本測地系を使用している。

9．自然科学分析は古環境研究所に委託した。

10．本書では原の辻遺跡関連報告書を略称で引用している（Tab 6 参照）。

11．本書では挿図図版を Fig，表組図版を Tab，写真図版を Pho で表記している。

12．本書の執筆・編集は林が行った。

遺跡内に設置された既存の基準点について，平成14年度４月１日の測量法の改正に伴い壱岐地区に高さの基準である国家水準点が設置され，標高の観測を再度実施したところ，0.417mの比高差があったことが判明した。したがって，平成17年度の調査および報告書から－0.417mの修正をおこなった新しい標高地を採用するものとする。

本 文 目 次

Ⅰ章　遺跡の立地する環境
1．地理的環境……1
2．歴史的環境
(1)　旧石器・縄文時代……2
(2)　弥生時代……4
(3)　古墳時代・古代……6
(4)　中近世……8

Ⅱ章　調査に至る経緯
1．原の辻遺跡における調査経緯……10
2．本事業調査の経緯……11

Ⅲ章　調査の概要……12
1．A調査地……14
(1)　調査地の概要
(2)　基本層序
(3)　遺構・遺物
①溝状遺構
②河道跡
2．B調査地……28
(1)　調査地の概要
(2)　基本層序
(3)　遺構・遺物
3．C調査地……30
(1)　調査地の概要
(2)　基本層序
(3)　遺構・遺物

Ⅳ章　本調査の総括……32

自然科学分析……36

挿図(Fig)目次

Fig 1　壱岐島の位置図 ……1
Fig 2　旧石器・縄文時代遺跡分布図 ……3
Fig 3　旧石器・縄文時代遺物図 ……3
Fig 4　弥生時代遺跡分布図 ……5
Fig 5　弥生時代遺物図 ……5
Fig 6　古墳・古代遺跡分布図 ……7
Fig 7　古墳・古代遺物図 ……7
Fig 8　中近世遺跡分布図 ……9
Fig 9　中近世遺物図 ……9
Fig10　調査地位置図 ……10
Fig11　調査区配置図①（安国寺A地区） …11
Fig12　調査区配置図②（原ノ久保A地区） 11
Fig13　調査地周辺遺構配置図 ……13
Fig14　A調査地平面図 ……14
Fig15　A調査地土層図 ……14
Fig16　溝状遺構実測図 ……15
Fig17　河道跡実測図 ……16
Fig18　河道跡土層図 ……16
Fig19　河道跡16層出土土器実測図① ……18
Fig20　河道跡16層出土土器実測図② ……19
Fig21　河道跡16層出土土器実測図③ ……20
Fig22　河道跡13層出土土器実測図① ……21
Fig23　河道跡13層出土土器実測図② ……22
Fig24　河道跡12層出土土器実測図 ……23
Fig25　河道跡出土石器実測図① ……24
Fig26　河道跡出土石器実測図② ……25
Fig27　B調査地平面図 ……28
Fig28　B調査地①区土層図 ……28
Fig29　B調査地③区土層図 ……28
Fig30　C調査地平面図 ……30
Fig31　C調査地土層図 ……30

表組(Tab)目次

Tab 1　壱岐・対馬面積比率表 …… 1
Tab 2　旧石器・縄文時代遺跡一覧表 …… 3
Tab 3　弥生時代遺跡一覧表 …… 5
Tab 4　古墳時代・古代遺跡一覧表 …… 7
Tab 5　中近世遺跡一覧表 …… 9
Tab 6　調査区・報告書対応表 ……12
Tab 7　Ａ調査地土層観察表 ……14
Tab 8　河道跡土層観察表 ……16
Tab 9　河道跡出土土器観察表① ……26
Tab10　河道跡出土土器観察表② ……27
Tab11　河道跡出土石器観察表 ……27
Tab12　Ｂ調査地①区土層観察表 ……28
Tab13　Ｂ調査地③区土層観察表 ……29
Tab14　Ｃ調査地土層観察表 ……30
Tab15　河道跡出土甕口縁部類型別集計表 …34
Tab16　河道跡出土底部類型別集計表 ……34
Tab17　河道跡出土石鎌形状別集計表 ……34

写真(Pho)目次

Pho 1　原の辻遺跡北部（カラー）
Pho 2　Ａ調査地河道跡遺構検出状況 ……17
Pho 3　Ａ調査地河道跡土層断面 ……17
Pho 4　Ｂ調査地①区土層断面 ……29
Pho 5　Ｂ調査地③区土層断面 ……29
Pho 6　Ｃ調査地①区遺構確認面 ……31
Pho 7　Ｃ調査地③区東側土層断面 ……31

Ⅰ章　遺跡の立地する環境

1．地理的環境

「…又南に一海渡る千余里，名付けて瀚海と曰い，一大國に至る。官は卑狗といい，副官は卑奴母離と曰う。方三百里可，竹林や叢林を多くし，三千許の家が有る。差かに田地を有し，田を耕しても猶食に不足し，同じように船に乗りて南北に市糴している…」

このように『魏志倭人伝』にて記される壱岐は対馬同様，大陸と日本を結ぶ飛び石のように玄界灘に浮かぶ島である。南北約17km，東西約15kmのやや南北に長い本島のほか多くの属島からなり，総面積約138.8km²，人口は約３万２千人を数える。本土との交通手段は海上交通が主で，福岡県博多と佐賀県呼子へ船便が結ばれている。長崎県には直通の交通手段が空路しかないため，行政区分としては長崎県に属するものの文化的，経済的には福岡県とのつながりが深い。

島全体の地形は比較的平坦な溶岩台地で，最高峰の岳の辻岳でも標高213mにすぎない。これは『魏志倭人伝』で「…居る所絶島…土地は山険しく，深林多く，道路は禽鹿の径の如し…良田無く…」と記される対馬とは対照的である。『魏志倭人伝』では「…田を耕しても猶食に不足し…」と記されるが，島南東部の深江田原は県内第一の沖積平野で，今日では圃場整備も進み，有数の穀物地帯となっている。原の辻遺跡はこの中心部に位置し，南から延びた舌状の台地（標高18m）を中心に約100haの規模を誇る。また遺跡北部には島内最長の幡鉾川（約8.8km）が流れ，東へ約1.5km進むとやがて内海湾に注ぎ込む。この幡鉾川では圃場整備に伴う河岸整備が行われる近年まで高潮の遡上がみられ，また遺跡より約２km上流には「船橋」という地名が残っていることから，太古より水上交通として機能していたことが想像される。

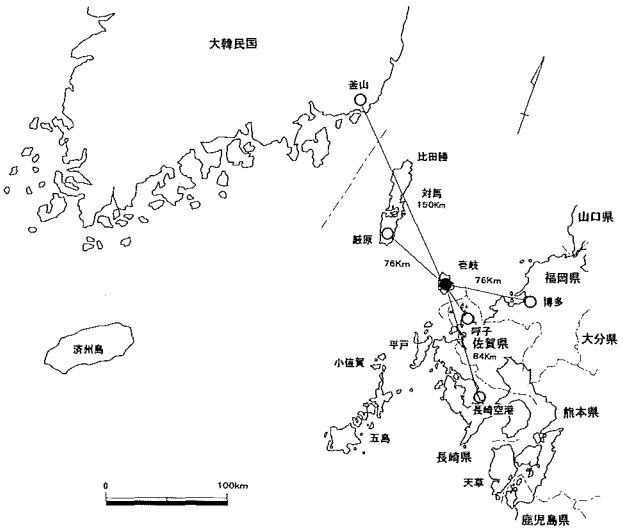
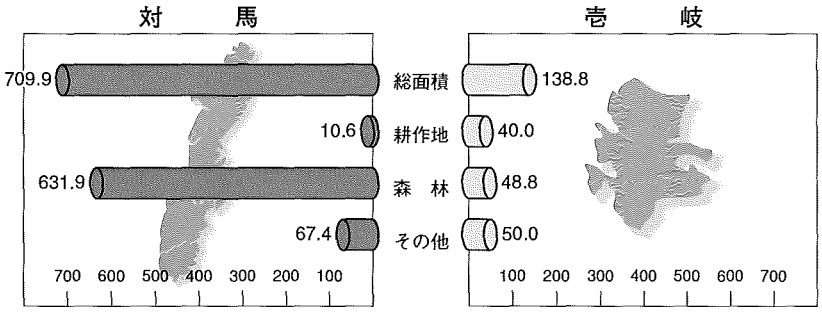


Fig 1　壱岐島の位置図



単位はkm²	その他	森林	耕地	総面積
対馬	67.4	631.9	10.6	709.9
壱岐	50	48.8	40	138.8

Tab 1　壱岐・対馬面積比率表

2．歴史的環境

(1) 旧石器・縄文時代

壱岐における旧石器・縄文遺跡は原の辻遺跡やカラカミ遺跡，双六古墳に代表される巨石古墳などの存在から，これまであまり日の目を見ない観があったが，近年の調査により少しずつではあるがその様相が明らかにされつつある。

壱岐における旧石器時代の遺物は名切遺跡，松崎遺跡，鶴田遺跡など島内の数カ所で確認されている。原の辻遺跡からは昭和50年（1975）に台形石器・ナイフ型石器・細石器・細石核などが広範囲にわたり検出された。特に台形石器は姶良火山灰（AT）降灰直後の石器組成の重要な器種として「原の辻型台形石器」と呼称されることとなり，時期は剥片尖頭器との共伴からナイフ形石器文化中期後半におくことができる。また平成３年（1991）には遺跡丘陵西側の水田下180cmの腐植土層からナウマン象の臼歯が出土している。ナウマン象と旧石器の共伴は確認されていないが，絶滅した動物化石とそれを狩猟した人類の遺物が同時に出土した例は全国でも長野県野尻湖遺跡などがあるにすぎず，原の辻遺跡はその例に追加される可能性もある。

壱岐における縄文時代の遺跡は鎌崎遺跡，名切遺跡，松崎遺跡などで壱岐島西側に集中し，しかも海岸部に立地して干潮時に遺跡が現れる，いわゆる潮間帯遺跡が多いことが特徴としてあげられる。鎌崎遺跡は表面採集ではあるが良好な石銛やスクレーパーなど特徴ある石器が確認されている。特に全体を直角三角形状に整形して底辺にゆるい弧状の刃部を作り出すスクレーパーは「鎌崎型スクレーパー」と呼ばれ，九州北西沿岸部のみならず韓国南岸の東三洞貝塚でも出土している。

壱岐における初めての縄文遺跡発掘の事例となった名切遺跡では，昭和58年（1983）に長崎県教育委員会によって発掘調査が行われている。この遺跡からは中期から晩期に造られた貯蔵穴30基が確認され，底面からカシの実など堅果類が，上面からは人頭大の礫や石皿が検出された。形状は多くが円形の筒型で，なかにはフラスコ状のものもある。湧水が見られる遺跡の立地状況から貯蔵と灰汁抜きの兼用と考えられる。礫や石皿は堅果類を竪穴に詰め，それに板材で蓋をした際の重しとしたのだろう。多様な石器も出土しており，漁撈・狩猟・植物採集活動を裏付ける多くの資料を得ることとなった。剥片石器の素材は黒曜石が多いが，壱岐産の黒曜石の他に佐賀県伊万里市腰岳産の良質な黒曜石もみられる。

また松崎遺跡では幾何学的細線刻文をもち，滑石粉末を混入した縄文前期の土器が確認されている。この種のものは韓半島の櫛目文土器との関連が指摘されている。

このように確認された石器や貯蔵穴などから，これらの遺跡が生活の糧を海にのみ求めるのではなく，多様な生活を営んでいたことがうかがえる。また縄文時代における海上交流の活発さも物語っており，対馬海峡を舞台にした九州北部と朝鮮半島を結ぶ海上交流が，後の稲作伝播の経路となったことを想起させる。

【Fig 3 出典一覧】

１．長崎県教育委員会（1978）「長崎県文化財調査報告書第37集『原の辻遺跡』」

２．長崎県教育委員会（1996）「『原始・古代の長崎県』資料編Ⅰ」

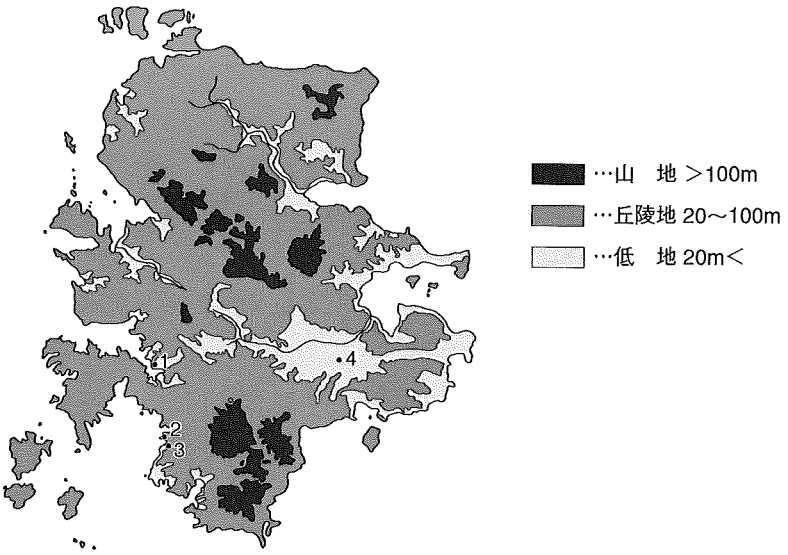
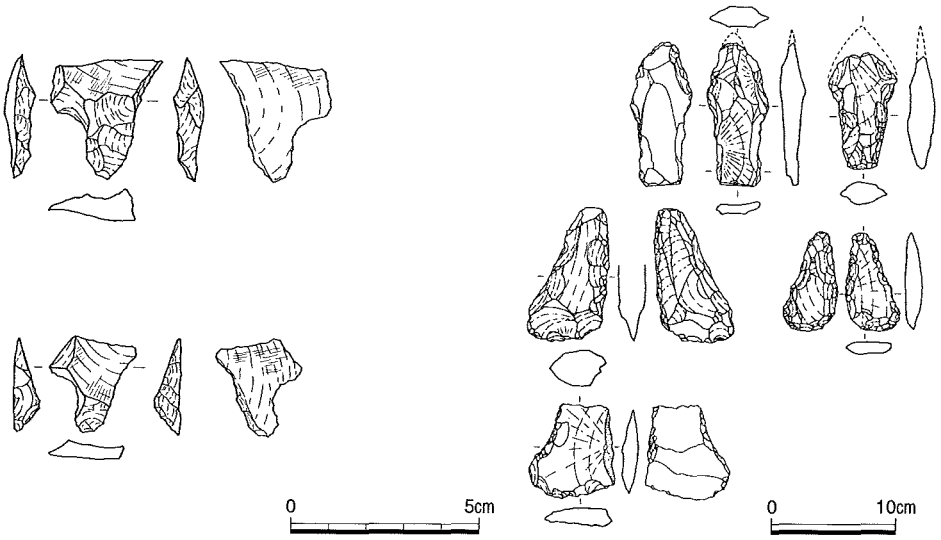


Fig 2　旧石器・縄文時代遺跡分布図

番号	遺跡名	主な出土品 備考	主な報告
1	松崎遺跡	縄文土器・縄文石器・貝輪 干潮帯遺跡　縄文早期や縄文時代平行期の韓半島新石器時代土器が出土する	勝本町教育委員会（2003）
2	鎌崎遺跡	縄文土器・弥生土器・石器 干潮帯遺跡　鎌崎型スクレーパーは韓半島南岸でも出土	横山　順・田中良之（1979）
3	名切遺跡	旧石器・縄文土器・縄文石器 干潮帯遺跡　貯蔵穴30基を確認	長崎県教育委員会（1985）
4	鶴田遺跡	旧石器（石核・フレーク・ナイフ型石器） 良質の漆黒黒曜石　磯道技法との類似が指摘される	長崎県教育委員会（1998）

Tab 2　旧石器・縄文時代遺跡一覧表



1．原の辻遺跡出土台形石器　　2．鎌崎遺跡出土石銛・スクレーパー

Fig 3　旧石器・縄文時代遺物図

(2) 弥生時代

弥生時代の遺跡は，壱岐島内で約60カ所が周知されているが，なかでも遺跡の規模，出土品の質量から突出するのが原の辻遺跡である。この遺跡は大正時代に発見され，その後の河川改修工事や耕地整理に伴って大量の土器や中国製銅鏡などが，また東亜考古学会による学術調査では貨泉が出土するなどして学術的に重要な遺跡として認知されるようになった。今日までの調査で遺跡面積100ha，3重の環濠を備え，石積みの船着き場などを有する大規模な集落であることが判明している。また『魏志倭人伝』に記載された記事と国名が一致する唯一の遺跡と特定され，平成12年には国特別史跡に指定されている。

車出遺跡は幡鉾川の約5㎞西側の上流にある山間部の狭い平野に所在する。この遺跡からは方格規矩鏡や貨泉，卜骨などの祭祀に関わる遺物が出土している。この遺跡の側には後に旧式内社の壱岐一の宮と称される天手長男神社が鉢形山山頂に営まれるため，この地が太古から宗教的な聖地として機能していたことが想像される。

カラカミ遺跡は標高70mを超える丘陵部を含む遺跡で，鉄製釣針や鯨骨製アワビオコシなど漁撈に関わる特徴的な遺物が出土することから，農耕文化を如実に示す原の辻遺跡とは古くから対比されてきた。しかし勝本町教育委員会が実施した発掘調査（昭和57～60）によって銅鏃や卜骨などが確認され，また環濠を備えている点などから原の辻遺跡との関連も指摘されるようになった。朝鮮半島から舶載された瓦質土器や滑石混入土器も確認されており，海を糧に生活したこの集落の性格がうかがえる。

車出遺跡，カラカミ遺跡両者とも遺跡の存続期間は原の辻遺跡と趨勢を同じくしており興味深い。あるいはこのいずれかが原の辻遺跡とは役割を分かち合った，すなわち呪術・祭祀のためのみに営まれた集落で，「卑狗」が統べる原の辻遺跡に対して「卑奴母離」が治める祭祀的な空間であったかと思われるが，これは想像の域を出ない。

祭祀的な遺跡としては，天ケ原セジョウ神遺跡をあげることができる。この遺跡は壱岐島の北端部に位置し，昭和36年（1961），護岸工事の際に中広銅矛が3本出土している。おそらくは朝鮮半島や大陸との境界を意識したもので，外的の侵攻を防ぐ目的と，航海の安全を祈る目的で埋納されたものと思われる。

ともに国境の島でありながら，壱岐と対馬では弥生時代の青銅製武器及び武器形祭器のあり方が異なることが従前から指摘されてきた。対馬ではこれまでに約130点の青銅製武器及び武器形祭器が確認されているのに対し，壱岐は10数本と10分の1にも満たない。そのうち出土地点が判明しているのは原の辻遺跡の甕棺から出土した戦国式（中国式）銅剣と上記の3本のみである。一方，壱岐，特に原の辻遺跡からは対馬ではあまり見られない銅鏃が100本以上確認されている。また平成14年度の芦辺町（現壱岐市）における発掘調査では，原の辻遺跡の原地区から鋳型が検出されている。これは原の辻遺跡で大量に検出された銅鏃が青銅素材として使用されたことを想起させ，今後の調査成果が期待される。

【Fig 5 出典一覧】

2．長崎県勝本町教育委員会（1985）「勝本町文化財調査報告書第4集『串山ミルメ浦遺跡』－第1次調査報告書－」

3．　長崎県教育委員会（1996）「『原始・古代の長崎県』資料編Ⅰ」

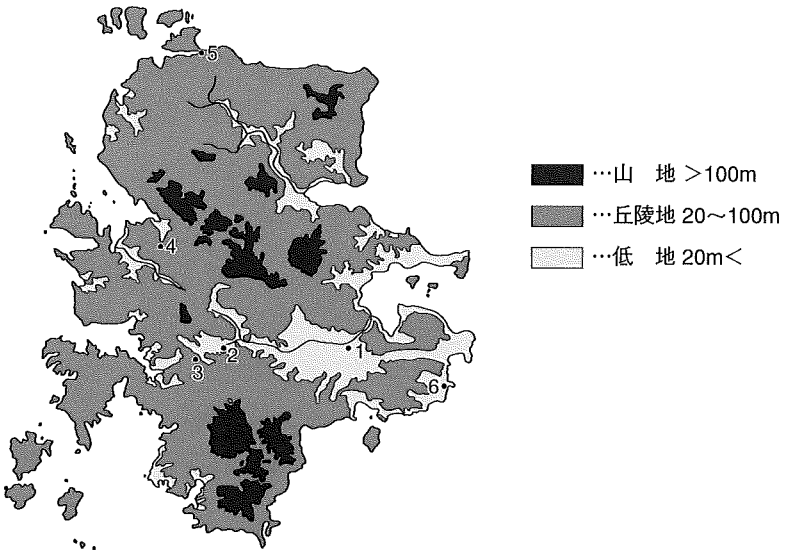
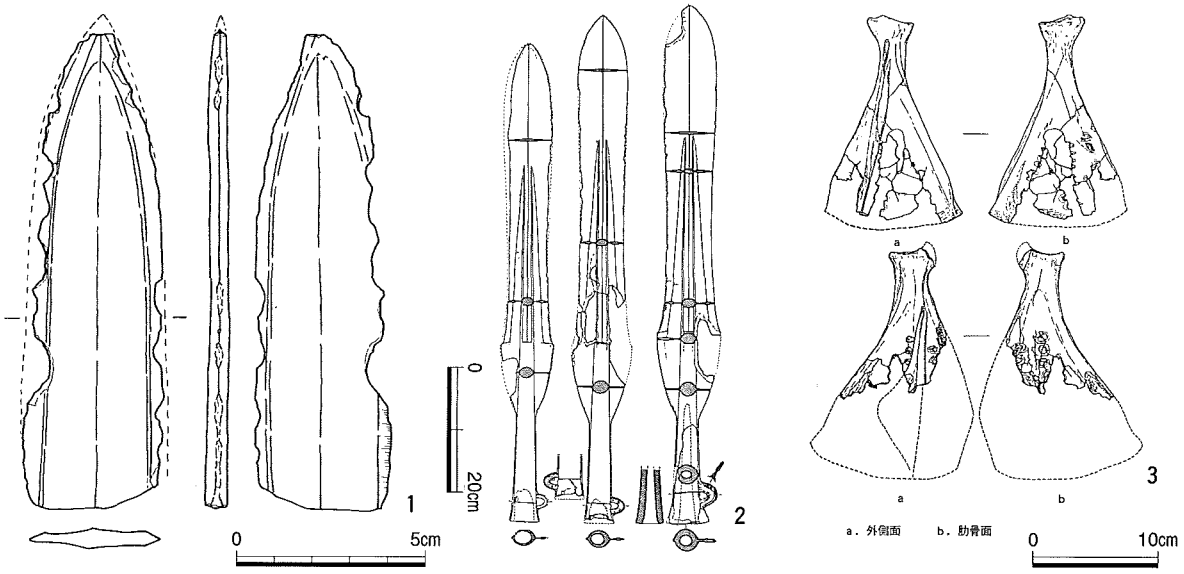


Fig 4　弥生時代遺跡分布図

番号	遺跡名	主な出土品 備考	主な報告
1	原の辻遺跡	弥生土器・石器・青銅器・鉄器 一支国の中心集落　韓半島系・大陸系の遺物が大量に出土	長崎県教育委員会・芦辺町教育委員会・石田町教育委員会
2	車出遺跡	弥生土器・銅鏡片・ガラス玉 丹塗磨研土器が多く出土	長崎県・郷ノ浦町教育委員会（1998）
3	戸田遺跡	弥生土器・韓半島系土器 車出遺跡と同一集落の可能性	郷ノ浦町教育委員会（2003）
4	カラカミ遺跡	弥生土器・骨格器・卜骨 海人的性格をもつが環濠も備える	勝本町教育委員会（1985.1988）
5	天ケ原セジョウ神遺跡	銅矛 中広銅矛が３本出土	勝本町教育委員会（1985）
6	大久保遺跡	弥生土器・須恵器 石棺墓　壮年男性の人骨が出土	長崎県教育委員会（1988）

Tab 3　弥生時代遺跡一覧表



原の辻遺跡出土戦国式銅剣（1/2）　天ケ原セジョウ神遺跡出土中広銅矛（1/12）　カラカミ遺跡出土卜骨（1/6）

Fig 5　弥生時代遺物図

(3) 古墳時代・古代

現在確認されている壱岐島内の古墳は256基にのぼるが，編年的に4世紀までを遡るものはない。現在周知されている古墳では大塚山古墳や俵山古墳が最も古く，5世紀後半頃に比定されているが，大部分が6世紀から7世紀に築造されたものである。形状は円墳が主で，これら古墳のうち90余基が壱岐島のほぼ中央部に集中している。これは一地方の古墳群としては突出した規模と内容であり，しかも各古墳の間には同じ設計図が使用されたと思われるほどの類似性が見られることは大きな特徴といえる。

鬼の窟古墳は県下最大の円墳で，石室は玄室・中室・前室からなり17mと長い。この古墳の西に位置する笹塚古墳も石室は15mと長く，その構造や構築方法は鬼の窟古墳と同じであり，その強い類似性は特筆される。県下最大の前方後円墳である双六古墳もこの古墳群にある。全長91m，玄室・前室・羨道からなる石室は全長11mをはかる。周溝はなく，自然地形を利用して版築した2段築成である。調査により石室内から金製品・金銅製品・青銅製品・鉄製品・ガラス玉や須恵器・土師器・唐二彩などの遺物が確認されている。

古代，律令体制下では壱岐は対馬同様に一国（下国）として扱われ，壱岐・石田の2郡が置かれた。従って国府が置かれ，やがて国分寺が設置されるのだが，壱岐では新たに建設する経済基盤がなかったのか，壱岐直の氏寺を国分寺に転用した旨が『延喜式』（玄蕃寮）に書かれている。その記録には「壱岐嶋直氏寺為島分寺。置僧五口」とあり，僧二十口が置かれた諸国の国分寺に比べて規模が小さく，そのため嶋分寺と呼ばれることになる。この嶋分寺の調査では平城様式の軒丸瓦と軒平瓦が少量確認されている。平城宮では第Ⅰ期（和銅元年～養老五年）に使用され，同范資料では大和大安寺などで出土している。このことは壱岐直が朝廷から范木を下賜されたことを想像させる。壱岐直は宮城と同じ瓦で氏寺の甍を飾ったのであろうか。

古代の遺跡としては串山ミルメ浦遺跡をあげることができる。ここでは卜占に使用された海亀の甲羅や，大量の鮑殻が出土している。亀卜は壱岐島内の弥生時代遺跡では確認されていないが，卜骨から引き継がれた卜占の伝統が感じられる。また鮑殻はここが調の加工場であったことを想像させる。

なぜ壱岐に多くの巨石古墳が存在するのか，その理由は古代の様子から想像することができる。まず壱岐には卜占の伝統が弥生時代から受け継がれており，やがて律令時代には卜部として朝廷における重要な職掌を担うに至ったことである。また壱岐は太古より海を生活の糧としているため海上交易に精通した海人族としての性格も併せ持っている。6世紀におこった朝廷と筑紫国磐井との戦いでは，朝鮮半島西岸，新羅付近の制海権を掌握していた磐井勢力を伊吉島造が駆逐したと『旧事記』の国造本紀に記録されている。朝鮮半島と朝廷との仲介をなしうる壱岐の勢力に対して朝廷から何らかの恩賞があったはずで，おそらくはそれを背景に古墳造営が行なわれたと思われる。

【Fig 7 出典一覧】

1．長崎県芦辺町教育委員会（1991）「長崎県芦辺町文化財調査報告書第5集『壱岐嶋分寺Ⅰ』」
2．長崎県勝本町教育委員会（1989）「勝本町文化財調査報告書第7集『串山ミルメ浦遺跡』－第2次調査報告書－」

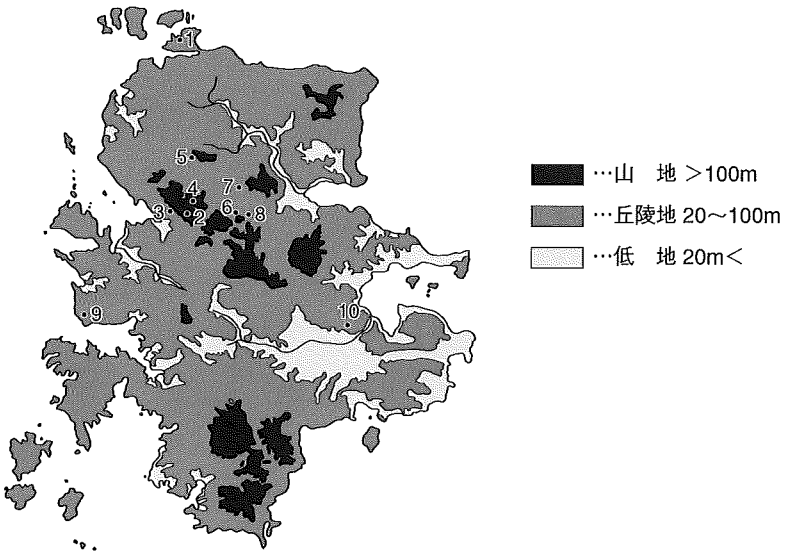
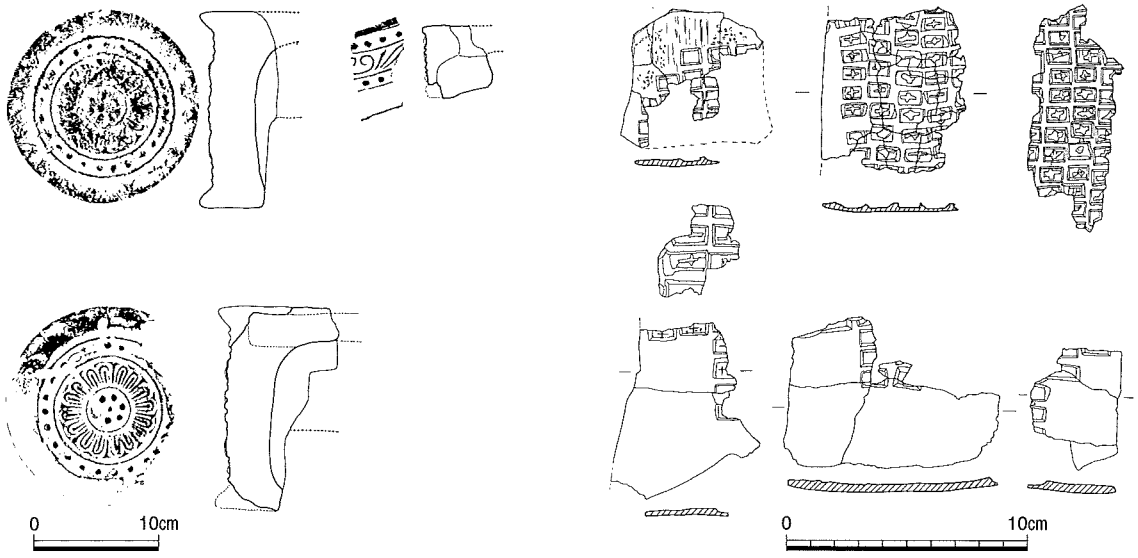


Fig 6　古墳・古代遺跡分布図

番号	遺跡名	主な出土品 備考	主な報告
1	串山ミルメ浦遺跡	土師器・須恵器・金属器・亀卜・骨格器 砂丘上の生産遺跡で甑把手と鮑殻が出土していることから干し鮑（調か？）生産が中心と推測	勝本町教育委員会（1985.1989.1990）
2	双六古墳	鉄製品・金銅製品・ガラス玉・須恵器・土師器・唐二彩 前方後円墳（全長91㍍後円部直径43㍍高さ10.6㍍前方部幅36㍍高さ５㍍）横穴式石室（全長11㍍玄室・前室）	勝本町教育委員会（2001）
3	対馬塚古墳	― 前方後円墳（全長約65㍍後円部直径約36㍍前方部幅25㍍）横穴式石室（全長9.4㍍玄室・前室）	長崎県教育委員会（1992）
4	笹塚古墳	須恵器・土師器・陶質土器・金銅製馬具 円墳（直径38㍍高さ10㍍方墳の可能性も）横穴式石室（14.8㍍玄室・中室・前室）	長崎県教育委員会（1992）
5	掛木古墳	須恵器・土師器・銅鏡片・金環・鉄製品 円墳（直径約30㍍高さ７㍍）横穴式石室（全長13.6㍍玄室・中室・前室）	長崎県教育委員会（1992）
6	鬼の窟古墳	須恵器・陶質土器（新羅系） 円墳（直径45㍍高さ13㍍）横穴式石室（全長16.5㍍玄室・中室・前室）	芦辺町教育委員会（1990）
7	兵瀬古墳	― 円墳（直径34㍍高さ８㍍）横穴式石室（全長12㍍玄室・中室・前室）	松永泰彦（1982）
8	壱岐嶋分寺跡	瓦・須恵器・土師器・輸入陶磁器 奈良平城宮6284Ａ型式と同范の軒丸・軒片瓦が出土	芦辺町教育委員会（1991～1994）
9	鬼屋窪古墳	須恵器 墳丘消失 石室も半壊しており開口方向など不明	副島康司・木村幾太郎（1981） 袖石に船の線刻あり
10	大塚山古墳	須恵器・鉄器 円墳（直径14㍍高さ２㍍）竪穴系横口石室（全長3.96㍍）	芦辺町教育委員会（1987）

Tab 4　古墳時代・古代遺跡一覧表



1．嶋分寺出土軒丸・軒平瓦（1/6）　　2．串山ミルメ浦遺跡出土ト甲（1/3）

Fig 7　古墳・古代遺物図

(4) 中近世

国境の島としての過酷な境遇は古代より壱岐に大きな禍根をもたらした。白村江の戦い（663）では多くの壱岐の民が徴発されて海の藻屑と消えたであろうし，寛仁三年（1019）の刀伊の入寇では壱岐島守藤原理忠をはじめ多くの住民が殺害または捕囚された。

鎌倉時代には文永・弘安の役，すなわち蒙古襲来（元寇）を受ける。鎌倉武士団の活躍や神風などが叙情詩的に語られる反面，多くの住民が殺戮された。『八幡愚童訓』には当時の様子を「(元軍兵が)見かくる者をうち殺し狼藉す。島民ささえかねて妻子を引具して深山に逃げ隠れけり。さるに（元軍兵が)赤子の泣声を聞きつけて探り求めて捕らえけり。さりければ片時の命を惜しむ世の習ひ(親が)愛児をさし殺して逃げ隠れするあさましき在様也」と記している。

室町時代の壱岐は「三島の倭寇」の１つとして知られる。三島とは壱岐・対馬・松浦（松浦は島ではない）のことで，倭寇とは14～16世紀にかけて朝鮮半島や中国大陸沿岸で活動した海賊的集団のことである。この背景には南北朝並立から始まる全国的な戦乱がある。もともと農業生産力が低い「三島」は戦乱の影響で生活物資を海外との交易に求めねばならなくなり，しばしば海賊行為を行なうようになるのである。鎌倉期を通じて壱岐対馬の守護職であった少貳氏に代わり，この頃壱岐は松浦党五氏（志佐・佐志・呼子・鴨打・塩津留）によって分割統治されたと『海東諸国紀』(1471）にある。この中に「唯多只（湯岳）郷，志佐代官源武，之を主(つかさど)る。戊子年（1468)，図書（李朝が授給した銅印）を受け歳遣一，二船を約す。書に一岐守護代官真弓兵部少輔源武と称す」とあり，志佐氏が真弓氏を代官として活発な交易を展開していたことがうかがえ，この交易は三浦の乱（1510）まで続けられたとされる。原の辻遺跡の西約１㎞に位置する覩城は真弓氏の居城と思われ，発掘調査では14世紀頃の高麗象嵌青磁・粉青沙器などが出土している。その後文明四年（1472）に肥前上松浦の岸岳城主である波多氏が壱岐に侵攻する。その際，松浦党五氏の代官衆が覩城で籠城・降服したといわれるが，先述の通り波多氏による壱岐領有後も志佐氏による朝鮮貿易は活発に行なわれていることから，壱岐の主導権移行はより複雑であったことが想起される。その波多氏も内紛から日高・松浦氏に倒され，平戸を本拠とする松浦氏による壱岐統治が開始される。

松浦氏による壱岐統治が開始された頃，長く続いた戦国時代も終焉を迎える。九州征伐の際，豊臣秀吉のもとへ参陣した松浦氏は領地を安堵される。文禄元年（1592）からはじまる朝鮮出兵（文禄・慶長の役）では，松浦氏は第一軍の小西行長配下に編成され，三千の軍勢で渡海している。またその前年には秀吉の命を受けて勝本城を築城している。『壹岐名勝圖誌』に「夜の中に手々に石を持上がり築けり」とあるように，突貫工事で築城したものと思われる。現在は勝本浦に向かって開かれた枡形虎口と，頂上部を鉢巻状にとりまく石垣が残されている。

【Fig 9 出典一覧】

長崎県教育委員会（1997)「原の辻遺跡調査事務所報告書第３集『覩城跡』幡鉾川流域総合整備計画（圃場整備事業）に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅲ」

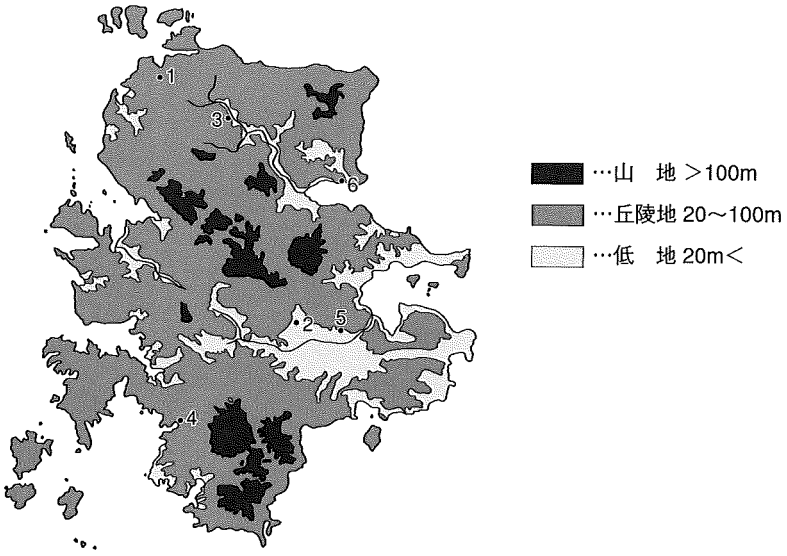


Fig 8　中近世遺跡分布図

番号	遺跡名	主な出土品 備考	主な報告
1	勝本城跡	— 朝鮮出兵時に豊臣秀吉の命で松浦鎮信が築城	— 兵站中継基地
2	覩城跡	輸入陶磁器 松浦党五氏の佐志氏代官真弓氏の居城 朝鮮貿易の拠点	長崎県教育委員会（1997）
3	文永の役新城古戦場	— 文永の役における戦場 壱岐守護代平景隆らが戦死	—
4	亀丘城跡	— 波多宗無が築城した城郭 近世からの壱岐の中枢部	—
5	壱岐国安国寺跡	— 足利尊氏発願の臨済宗寺 高麗版大般若経を所蔵	—
6	弘安の役瀬戸浦古戦場	— 弘安の役における戦場 壱岐守護代少貳資時らが戦死	—

Tab 5　中近世遺跡一覧表

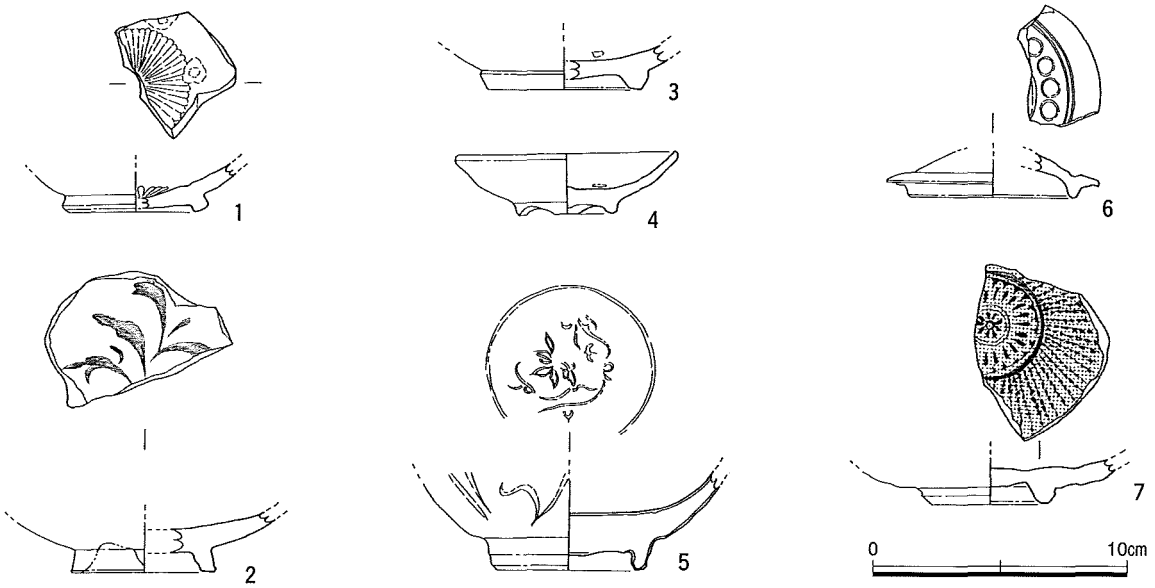


Fig 9　中近世遺物図

Ⅱ章　調査に至る経緯

1．原の辻遺跡における調査経緯

Fig10　調査地位置図（1/12,000）

原の辻遺跡は大正年間に松本友雄によって発見された。その後の河川工事や耕地整理の際に大量の土器や中国製鏡などが確認され，遺跡の重要性が認識されるようになった。昭和26～36年(1951～1961)には京都・九州大学を中心とする東亜考古学会によって学術調査が行なわれた。初の本格的な発掘が行なわれたこの調査では各種鉄製品や貨泉，あるいは朝鮮半島系や楽浪系土器が出土したことから大陸との関連が強い遺跡として学界で注目を集めた。反面，地元における遺跡への関心は低く，やがて遺跡の位置する丘陵周辺では畑地から水田への転換が進められた結果，遺跡はかなりの損壊を受けた。昭和49年（1974）には石田大原地区において，水田化改良工事にともなう発掘調査によって墓域が確認された。この墓域は弥生時代前期末から中期を中心とする箱式石棺墓および甕棺墓から構成されており，区画溝を伴う本格的な墓域として注目された。この調査を受けて昭和50～52年度（1975～1977）に範囲確認調査が実施され，遺跡の範囲が舌状台地の南側まで広がることが確認された。平成に入ると幡鉾川流域総合整備事業にともない，舌状台地周辺の低地部を中心に広範囲な発掘調査が行なわれた。これにより原の辻遺跡が台地周辺の低地部に幾重にも環濠を巡らす，遺跡規模約100haにもおよぶ大規模環濠集落であることが判明した。平成７年（1995）以降は集落構造の把握を目的とした範囲確認調査が実施された。これまでの調査により環濠の外側に墓域が確認され，丘陵上の調査においては多数の竪穴住居跡とともに，丘陵の最高地から掘立柱建物を中心とする祭儀場跡が発見された。また低地部の調査も継続して行なわれ，複雑に巡る環濠の様相が明らかになるとともに，各年度の調査で確認された環濠間の繋がりについて検討可能な基礎資料を得ることとなった。

また旧芦辺町教育委員会によって平成11年（1999）から，また旧石田町教育委員会によって平成13年（2001）から遺跡整備にともなう発掘調査が行なわれている。旧芦辺町は丘陵部を中心に調査を行ない，多数の住居跡を確認するとともに権（秤の錘）や青銅製ヤリガンナ，中広銅矛や鋳型などの重要な遺物を確認している。また旧石田町は大原・大川地区の墓域を中心に調査を行ない，甕棺墓22基，多紐細文鏡や細形銅剣などを確認している。この遺跡整備にともなう発掘調査は壱岐４町（他に郷ノ浦町・勝本町）の合併（平成16年３月）により誕生した壱岐市教育委員会に引き継がれている。

2．本事業調査の経緯

主要地方道勝本石田線は遺跡の丘陵部西側を南北に走るが，幅員が狭く朽化も進んでいるため，改良工事に向けての協議が平成５年度(1993)から行なわれた。改良工事に当たっては既存の県道を拡幅する案も検討されたが，丘陵部では重要な遺構が出土する可能性もあり，また将来的に遺跡整備を行なう際の支障となる恐れがあることから，丘陵西側低地部に新たに取り付けることとなった。

その間，遺跡の発掘調査では船着き場跡などの重要遺構が次々に発見され，平成９年(1997)には国史跡となり，その３年後の平成12年(2000)には異例の早さで国特別史跡に指定されるに至った。

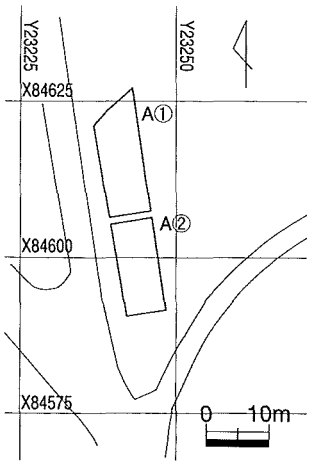


Fig11　調査区配置図①（安国寺Ａ地区）（１/1,200）

県道改良工事に伴う調査は平成14年度（2002）に着手し，2,400㎡の調査が行なわれた。当初3,200㎡の予定であったが，水利権が解決していないため調査できない区域が約600㎡存在している。この区域については工事着工直前に調査を行なうことで壱岐地方局建設部建設課道路班と合意している。このＨ14県道調査〔**福田・小玉2004**〕では遺跡西側低地部が調査され，環濠１条・河道２条・溝１条などが確認されている。続くＨ15県道調査〔**林2005**〕においても同じく遺跡西側低地部3,100㎡の調査が実施され，河道３条，溝状遺構９条，護岸遺構１基，樹皮敷遺構１基，祭祀土坑１基，水田遺構（畦畔）１基，集石遺構１基，小児甕棺墓１基などが確認されている。Ｈ16県道調査〔**林2006**〕では原ノ久保Ａ地区の調査を行い，溝状遺構１条，住居跡１基，不明遺構１基，埋甕遺構１基，ピット群などが確認されている。

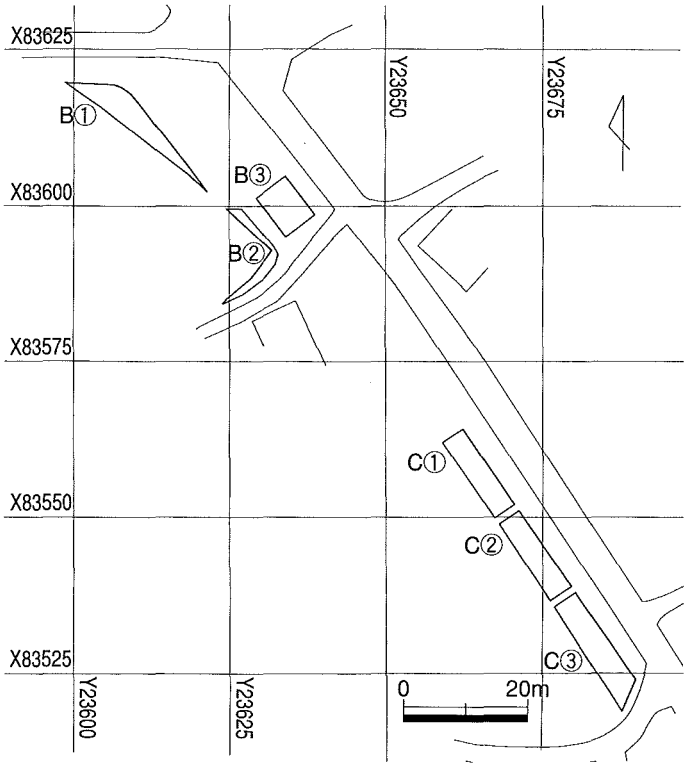


Fig12　調査区配置図②（原ノ久保Ａ地区）（１/1,200）

Ⅲ章　調査の概要

本年度調査（H17県道調査）では，原の辻遺跡北側に位置する安国寺A地区にA調査地，南側に位置する原ノ久保A地区にB調査地およびC調査地を設定した。調査地面積は1,009㎡，調査期間は平成17年11月10日から平成18年3月10日を要した。

安国寺A地区はH6緊急調査〔**山下・川口1997**〕で大溝や土坑などが確認されている。特にⅢ区2号土坑（廃棄土坑）やⅥ区13号土坑（石器片廃棄土坑）は，遺跡北側の丘陵部周辺に居住域が存在したことを示唆している。本調査におけるA調査地は，この大溝の流れや居住域の確認を検証することを目的に行った。

原ノ久保A地区はこれまでの調査成果から，墓域としての評価がなされている。特にH8範囲確認調査〔**宮崎1999**〕D区では石棺墓12基，石蓋土壙墓5基，土壙墓1基，甕棺墓2基の計20基が確認されている。この墓群は調査区西側に偏る傾向を示している。調査区東側に墓群が薄い理由は後の削平によるものか，そもそも墓群が存在しないのか不明である。また墓群西側で確認された溝が墓域の区画を意図するものであるかどうかなど，検討すべき点も多い。本調査におけるC調査地は，これまでの調査では解明できなかった点について，有意義な成果をもたらすと思われた。

またH16県道調査〔**林2006**〕A調査地において確認された溝状遺構が，西側へどのようにつながるのかも検討課題であったが，本調査におけるB調査地において検証することができた。

以上のように，本調査では過去の調査成果を十分に考慮し，調査を実施した。

番号	本文略称	報告書名 サブタイトル	タイトル	発行	発行年
1	H7圃場整備	原の辻遺跡調査事務所報告書　第1集 畑鉾川流域総合整備計画（圃場整備事業）に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅱ	原の辻遺跡・安国寺前A遺跡・安国寺前B遺跡	長崎県教育委員会	1999
2	H8範囲確認	原の辻遺跡調査事務所報告書　第11集 原の辻遺跡発掘調査事業に係る範囲確認調査報告書Ⅰ	原の辻遺跡	長崎県教育委員会	1999
3	H10範囲確認	原の辻遺跡調査事務所報告書　第18集 原の辻遺跡発掘調査事業に係る範囲確認調査報告書	原の辻遺跡	長崎県教育委員会	2000
4	H12範囲確認	原の辻遺跡調査事務所報告書　第22集 原の辻遺跡発掘調査事業に係る範囲確認調査報告書Ⅲ	原の辻遺跡	長崎県教育委員会	2001
5	H16県道	原の辻遺跡調査事務所報告書　第32集 主要地方道勝本石田線道路改良工事に伴う調査報告書③	原の辻遺跡	長崎県教育委員会	2006
6	H17県道	原の辻遺跡調査事務所報告書　第34集 主要地方道勝本石田線道路改良工事に伴う調査報告書④	原の辻遺跡	長崎県教育委員会	2006

※番号はFig13と対応

Tab 6　調査区・報告書対応表

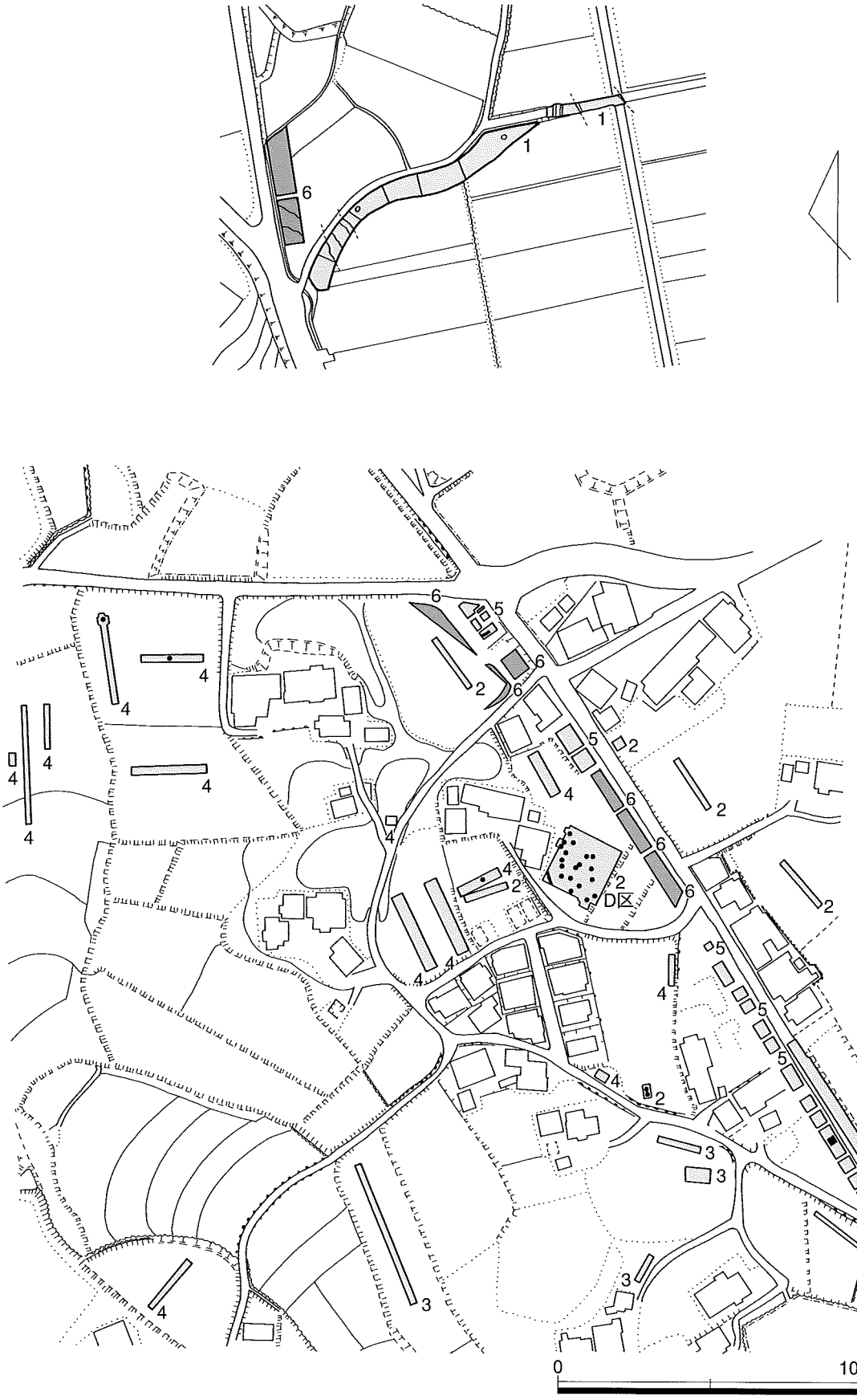


Fig13　調査地周辺遺構配置図（1/2,000）

1．A 調 査 地

(1) 調査地の概要

①**所在地**：壱岐市芦辺町深江栄触字殿川586-１・585-１・613－１

②**調査地面積**：262.7㎡

③**調査地現況**

Ａ調査地は県道勝本石田線と町道殿川線に隣接する水田に位置する。この調査地の南側ではＨ７圃場整備調査〔**山下・川口1997**〕の際に「大溝」や土坑などが確認されている。特に土坑には土器片や石器未製品などを多く含むものがあり，居住域や石器工房群が近辺にあった可能性が指摘されている。

(2) 基本層序（Fig14A－A'→Fig15，Tab７）

上層（１～３層）の水田耕作土層，中層（４～５層）の造成層，下層（７～８層）の基盤層からなる。

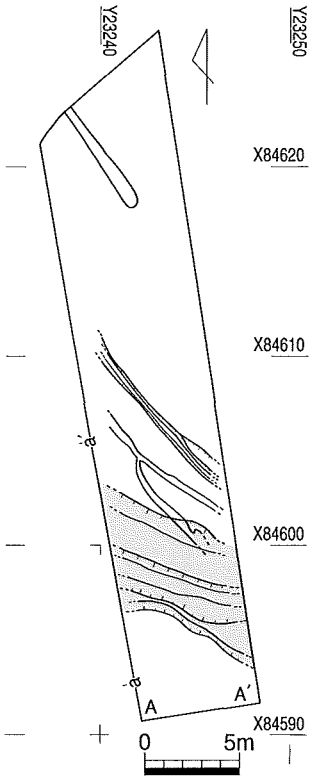


Fig14　A調査地平面図（１/400）

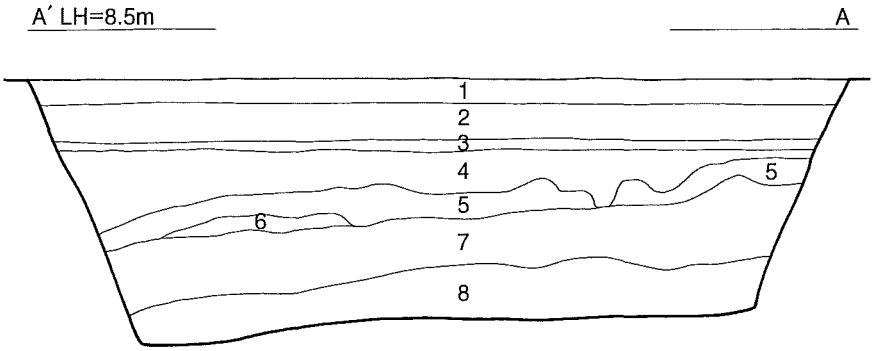


Fig15　A調査地土層図（１/60）

番号	土色質	注　記	備　考	
１層	茶褐色土層	水田の耕作土。	水田層	A②区西壁１層に相当
２層	褐灰色粘質土層	水田の耕作土（床土）。	水田層	A②区西壁２層に相当
３層	明茶色土層	１，２層面水田造営時の客土か。	造成層	A②区西壁３層に相当
４層	茶褐色硬質土層	上部には黒色斑文が見られる。全体的な色調は茶系だが，青灰硬質土に茶褐色土が密に混入する。	造成層	A②区西壁４層に相当
５層	茶褐色硬質土層	４層よりも茶色が強く，風化小礫や炭化物の混入物も多い。	造成層	A②区西壁６層に相当
６層	茶褐色混礫土層	大小の礫が混入する。５層同様に客土と思われる。	造成層	
７層	茶褐色風化小礫土層	小さな礫が風化している土層。硬質ではあるが掘削は可能。所々，粘質土が入る。	基盤層	A②区西壁18層に相当
８層	青灰色風化礫層	岩盤の風化層。	基盤層	A②区西壁19層に相当

Tab７　A調査地土層観察表

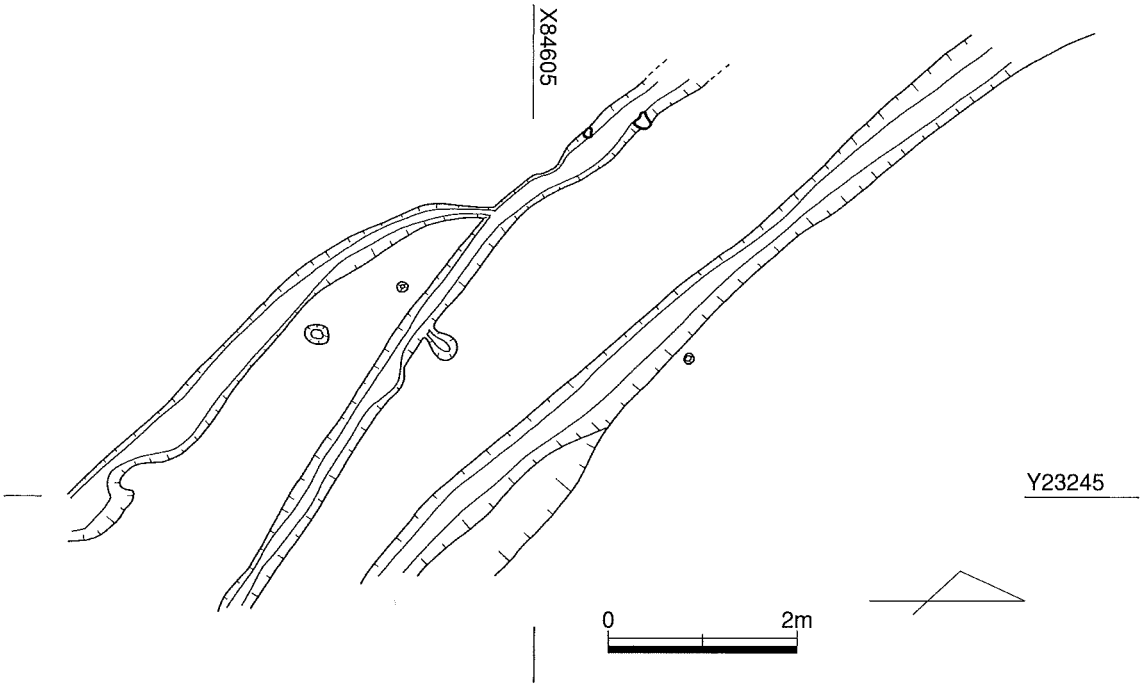


Fig16　溝状遺構実測図（1/80）

(3)　遺構・遺物

①溝状遺構

・遺構（Fig16）

合計で4条確認した。後述する河道跡と同様の軸をとる。遺構に含まれる遺物は極端に少なく（1号溝6点，2号溝7点，3号溝3点），摩滅した土器片のみであった。河道跡との切り合い関係や，上層（水田耕作土層）に含まれる須恵器などから考えれば，古墳から古代にかけての人工的な用水路かと思われる。

②河道跡

・遺構（Fig17，Fig18，Tab 8）

調査区南側で検出した。幅約5.5m深さ約1mで，川底の標高は5.8mを測る。この河道跡は，南側ではH7圃場整備調査〔**山下・川口1997**〕の大溝とつながるものと思われる。

土層から観察する河道跡は南側河岸の立ち上がりが急峻で，基盤層である19層を大きく削るように流れていたことがわかる。一方，北側河岸は緩やかな立ち上がりで対照的である。

・遺物（Fig19～26，Tab 9～11）

遺構から出土した遺物（12，13，16層出土）は土器片が408点，石器片が31点にのぼる。出土する層位が16層，13層，12層に集中するとともに，硬く締まった小礫に伴って出土する傾向を示している。破片が多く，土器口縁部については残存状況のよいものだけ口径復元を行って図化した。

土器片の説明を行う。1～65は16層出土の甕口縁部破片である。66～70は16層出土の壺口縁部破片である。71～73は16層出土の高坏各部位破片である。74～83は16層出土の底部破片である。74～81は甕，82～83は壺の底部と思われる。84は甕棺材の口縁部破片で，橋本編年におけるKⅡb～cにあたると思われる〔**橋本1979**〕。

85～122は13層出土の甕口縁部破片である。123～125は13層出土の壺口縁部破片である。126～134は13層出土の底部である。すべて甕と思われる。135～136は甕棺材の口縁部破片と思われる。84同様にKⅡb～cにあたると思われる。

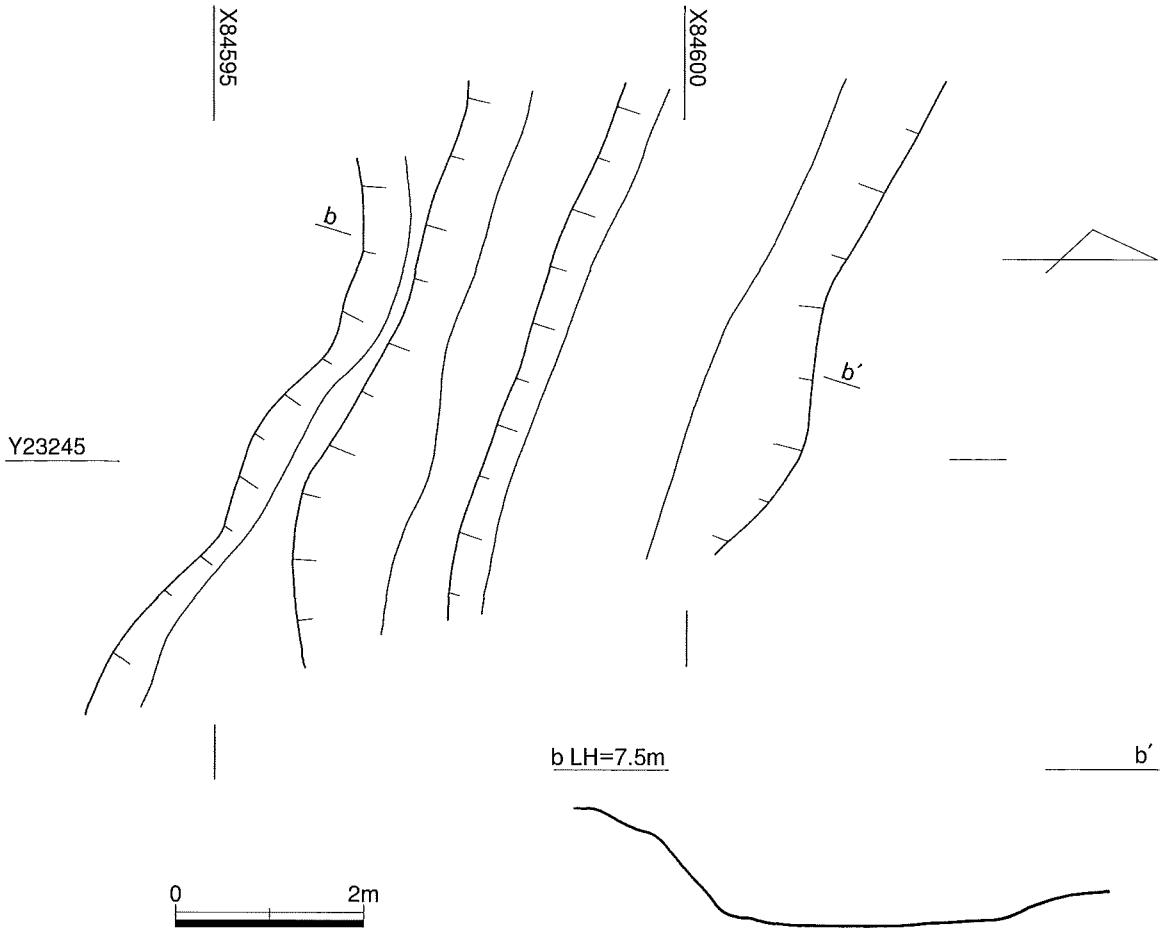


Fig17　河道跡実測図（1/80）

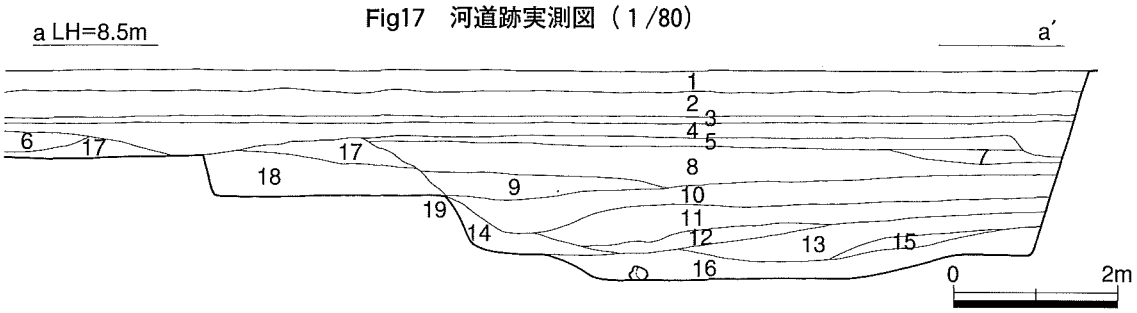


Fig18　河道跡土層図（1/90）

番号	土色質	注記	備考	
1層	茶褐色土層	—	水田層	A②区南壁1層に相当
2層	褐灰色粘質土層	—	水田層	A②区南壁2層に相当
3層	明茶色土層	—	造成層	A②区南壁3層に相当
4層	茶褐色硬質土層	—	造成層	A②区南壁4層に相当
5層	褐灰色弱粘質土層	小礫やマンガン粒などの混入物を多く含む。	造成層	
6層	茶褐色硬質土層	—	造成層	A②区南壁5層に相当
7層	褐灰色硬質土層	8層に土質は近いが色調がやや明るい。		
8層	暗緑灰色硬質土層	上部では灰色が強いが，下部は暗くなり緑色のような印象を受ける。さくさくとした感触。		
9層	暗灰色硬質土層	8層に似るがやや暗い。		
10層	暗褐色硬質土層	8層と土質は近い。色調がより褐色。上部に粒子の大きな砂が混入する。		
11層	茶褐色混砂利土層	10層よりも明るく，まばらに砂利が混入する。		
12層	茶褐色混礫土層	帯状に13層に乗り上げるように堆積する。小礫と土器片を多く含む。		
13層	茶褐色土層	12層よりも茶色が強い。やや硬質で礫や土器片は含まない。		
14層	茶褐色土層	16層に似るが礫の混入は少ない。		
15層	茶褐色土層	13層よりも明るい。13層と16層の中間層か。		
16層	茶褐色混礫土層	かなり大きな礫を含む。土器片も多い。		
17層	茶褐色混礫土層	土塁状に堆積する。		
18層	茶褐色風化小礫土層	—	基盤層	A②区南壁7層に対応
19層	青灰色風化礫層	—	基盤層	A②区南壁8層に対応

Tab 8　河道跡土層観察表

137～157は12層出土の甕口縁部破片である。157のみ弥生時代後期の範疇に入るもの思われる。158～159は壺口縁部破片である。160～167は12層出土の底部破片である。167のみ壺の底部と思われる。

石器片の説明を行う。１～11は石鏃である。出土層位はTab17を参照されたい。12～13は敲石である。14～15は石斧で，ともに片刃である。16は石剣である。

註）Fig19～24は総括で検討対象となった遺物すべてを図化していない。また類型（Ⅰ～Ⅳ類）の層位比率をFig19～24は反映していない。

【参考文献】

橋本達也（1979）「甕棺の編年的研究」『九州縦貫自動車関係埋蔵文化財調査報告ＸＸＸＩ』福岡県教育委員会

Pho 2　A調査地河道跡遺構検出状況（北から）

Pho 3　A調査地河道跡土層断面（東から）

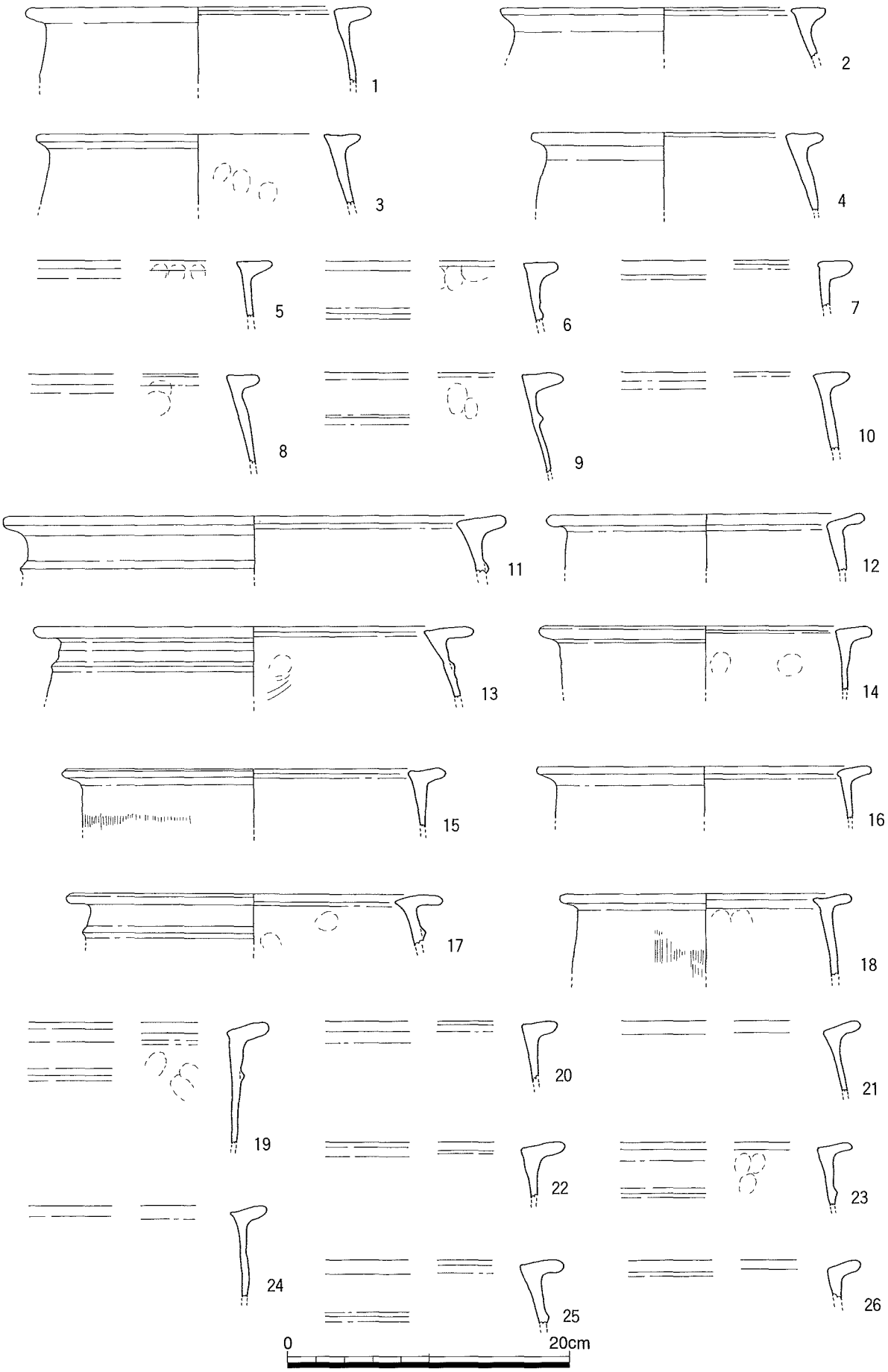


Fig19　河道跡16層出土土器実測図①（1/4）

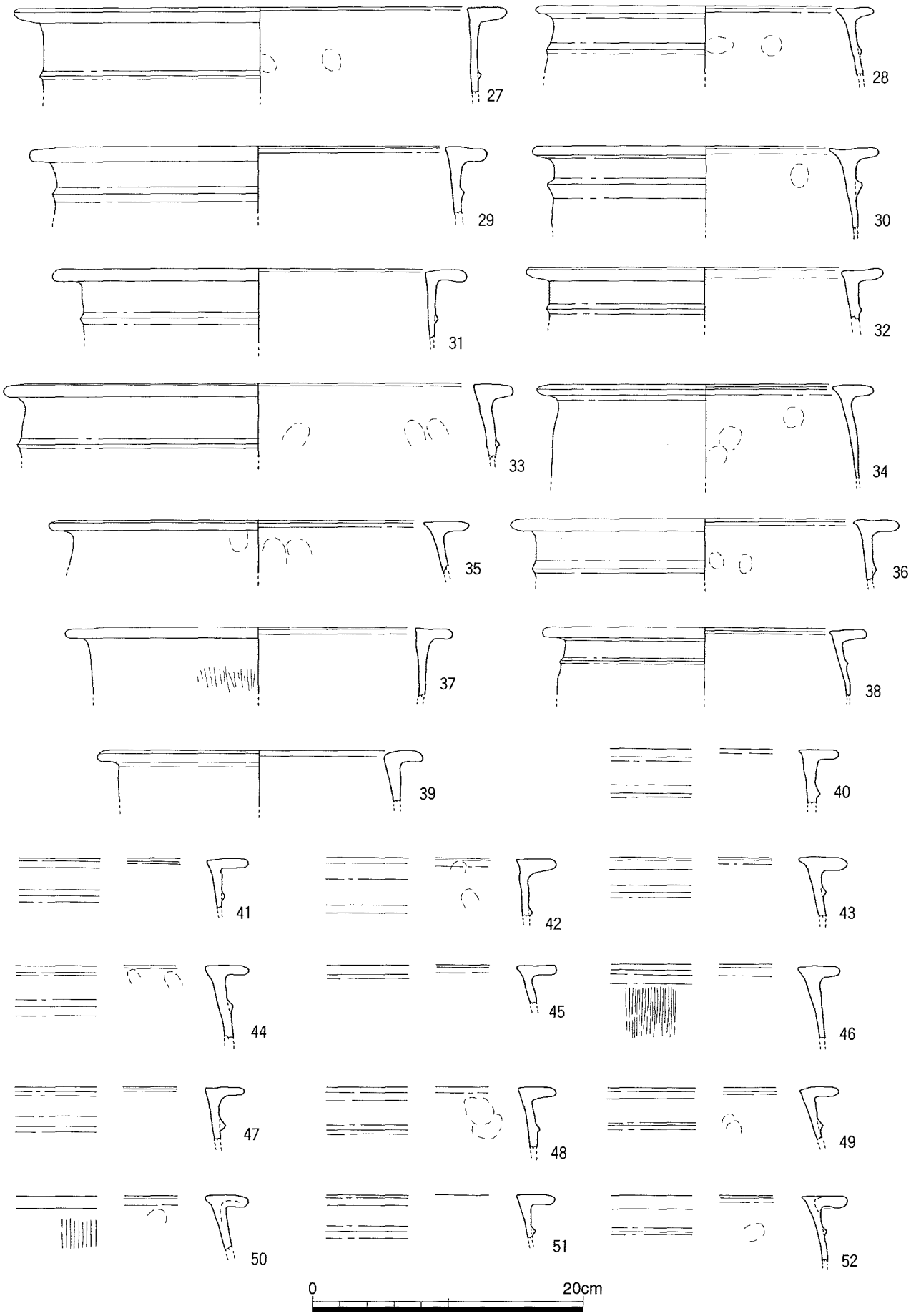


Fig20　河道跡16層出土土器実測図②（1／4）

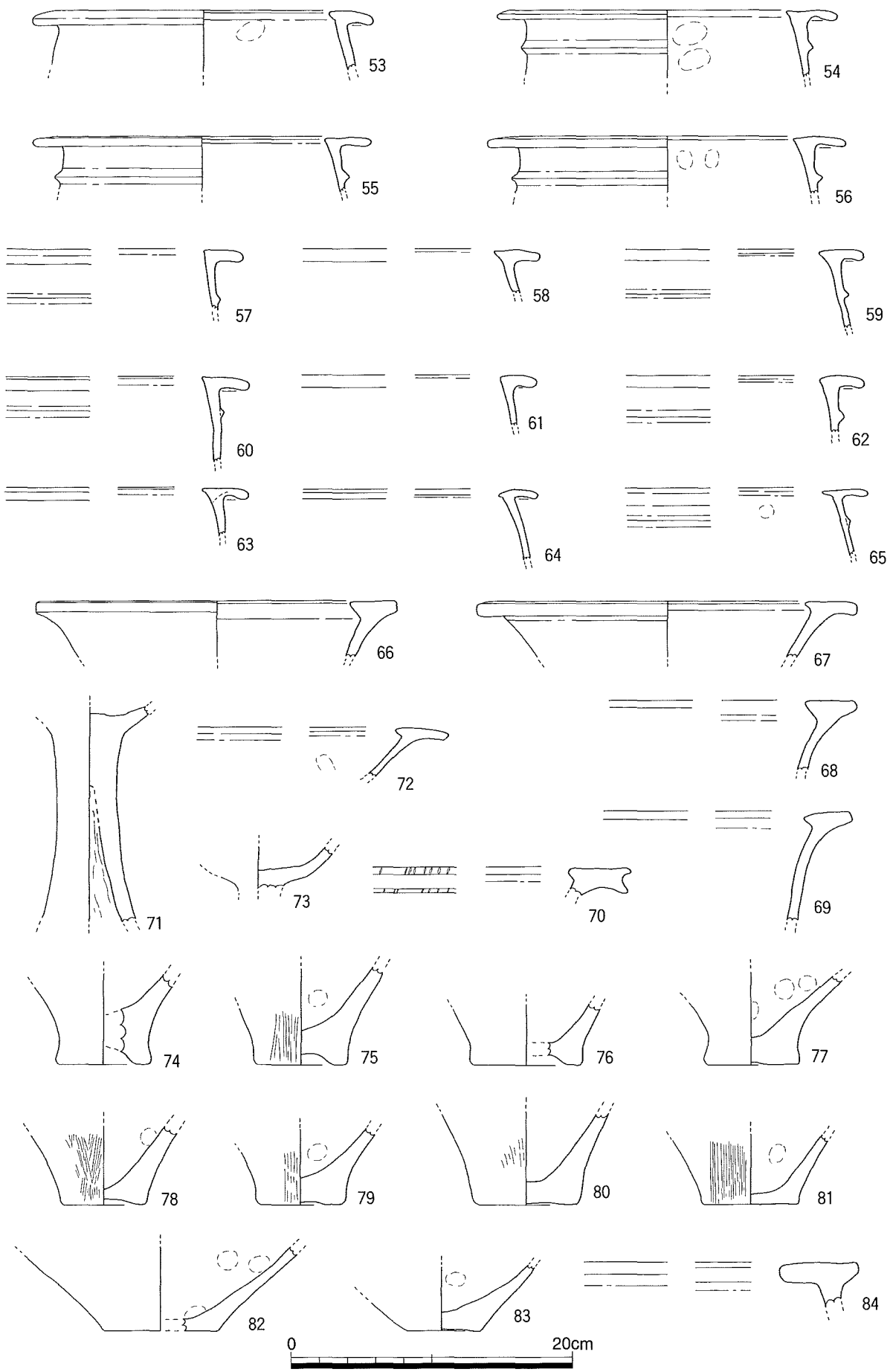


Fig21　河道跡16層出土土器実測図③（1／4）

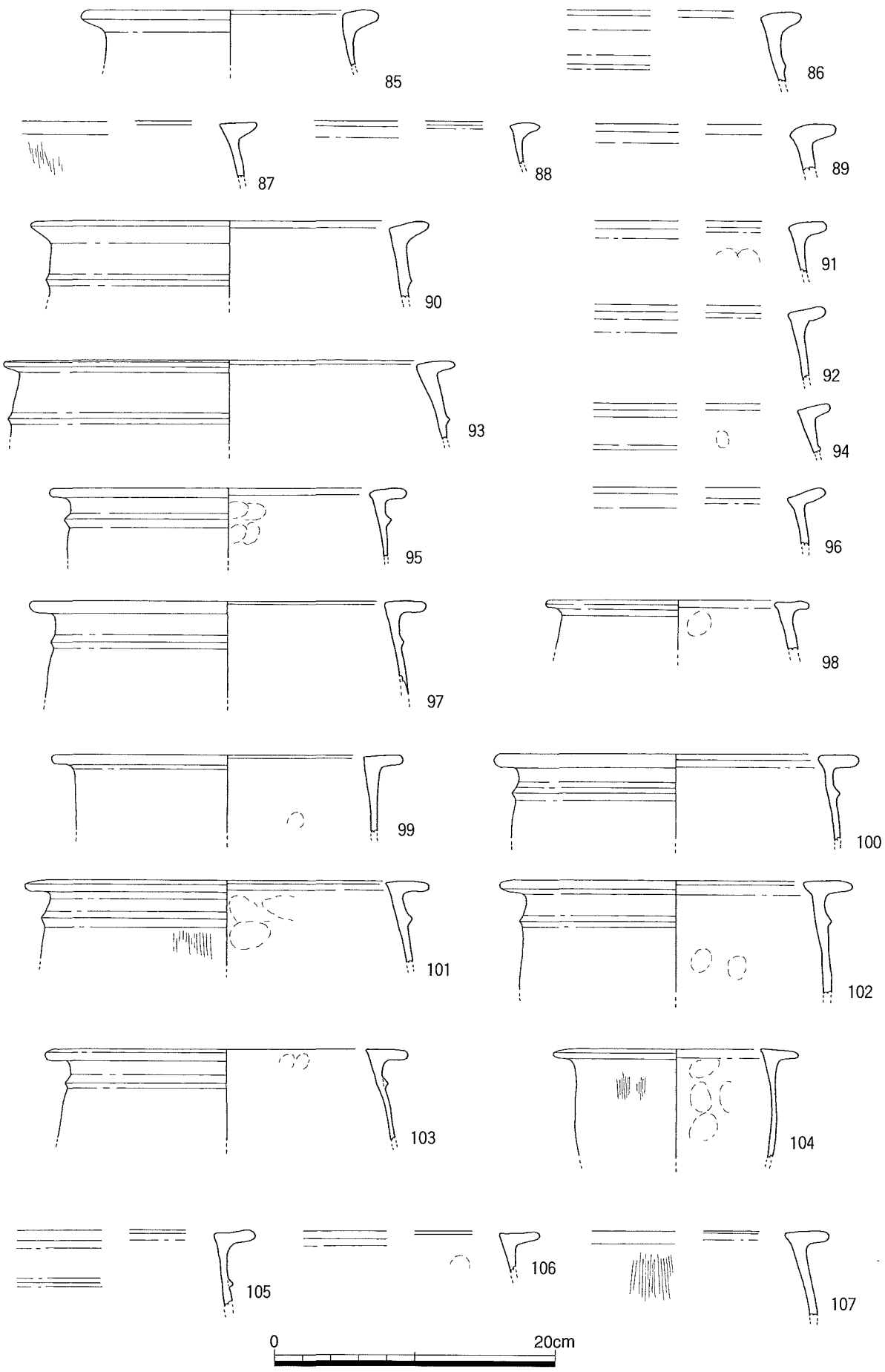


Fig22　河道跡13層出土土器実測図①（1／4）

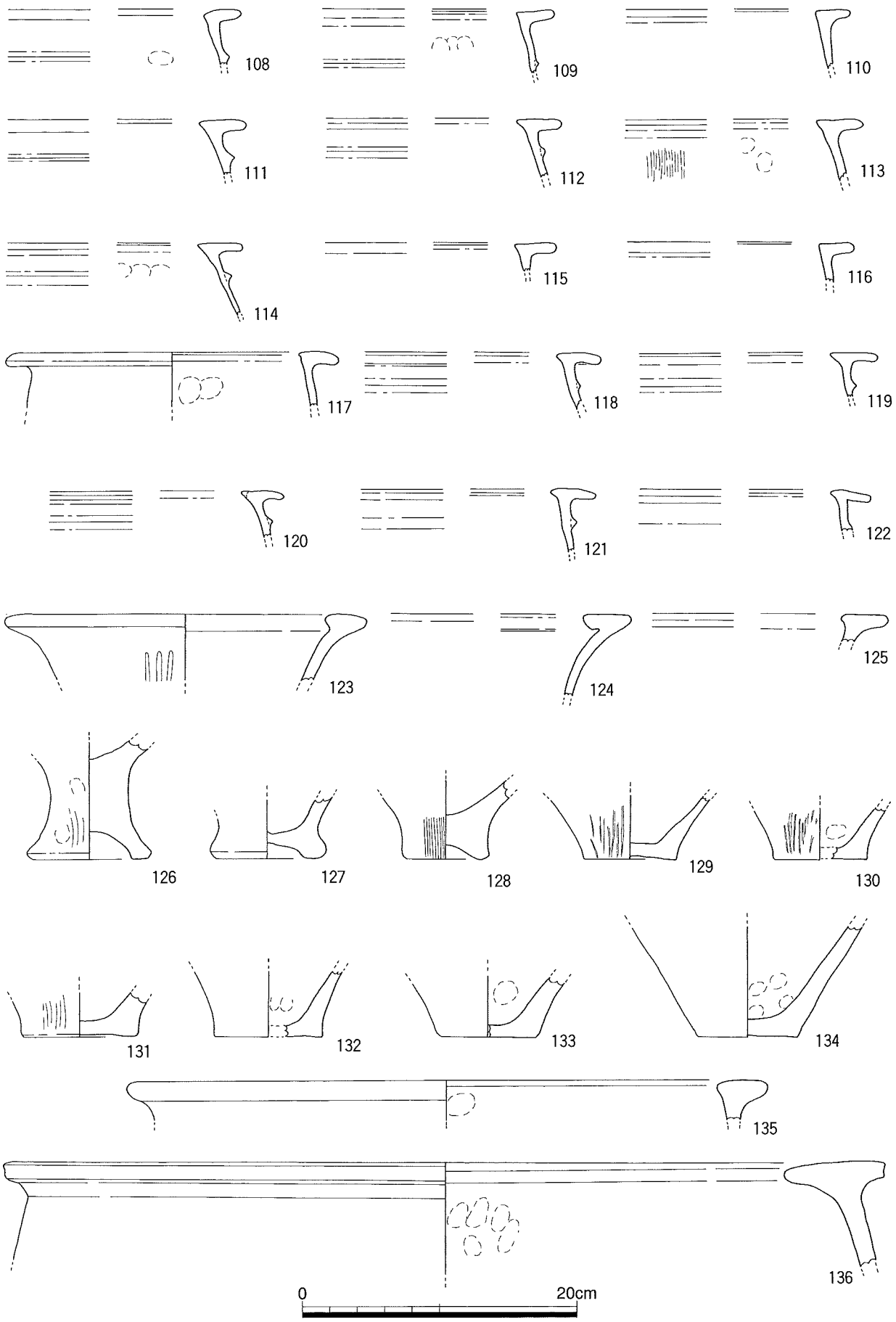


Fig23　河道跡13層出土土器実測図②（1／4）

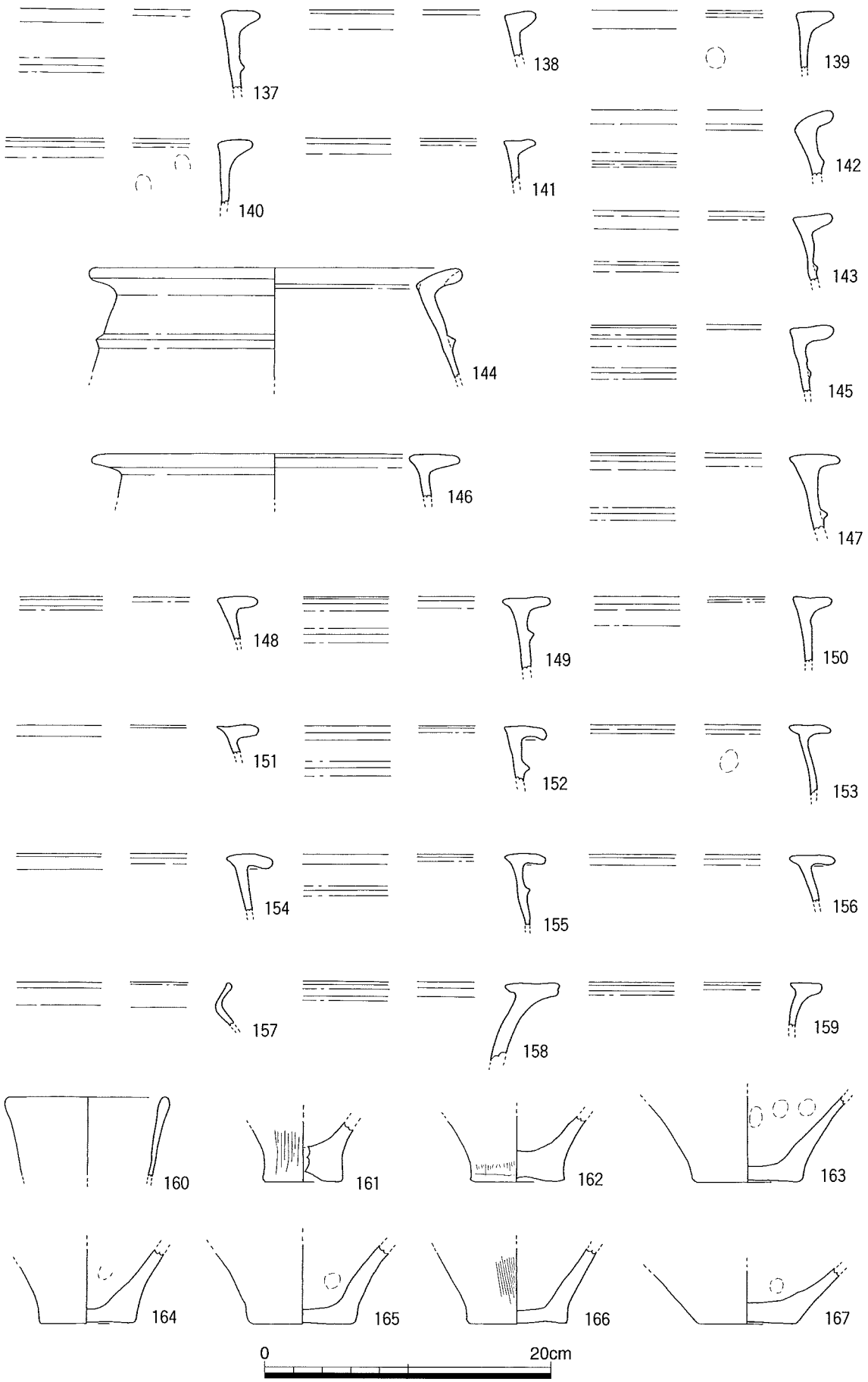


Fig24　河道跡12層出土土器実測図（1／4）

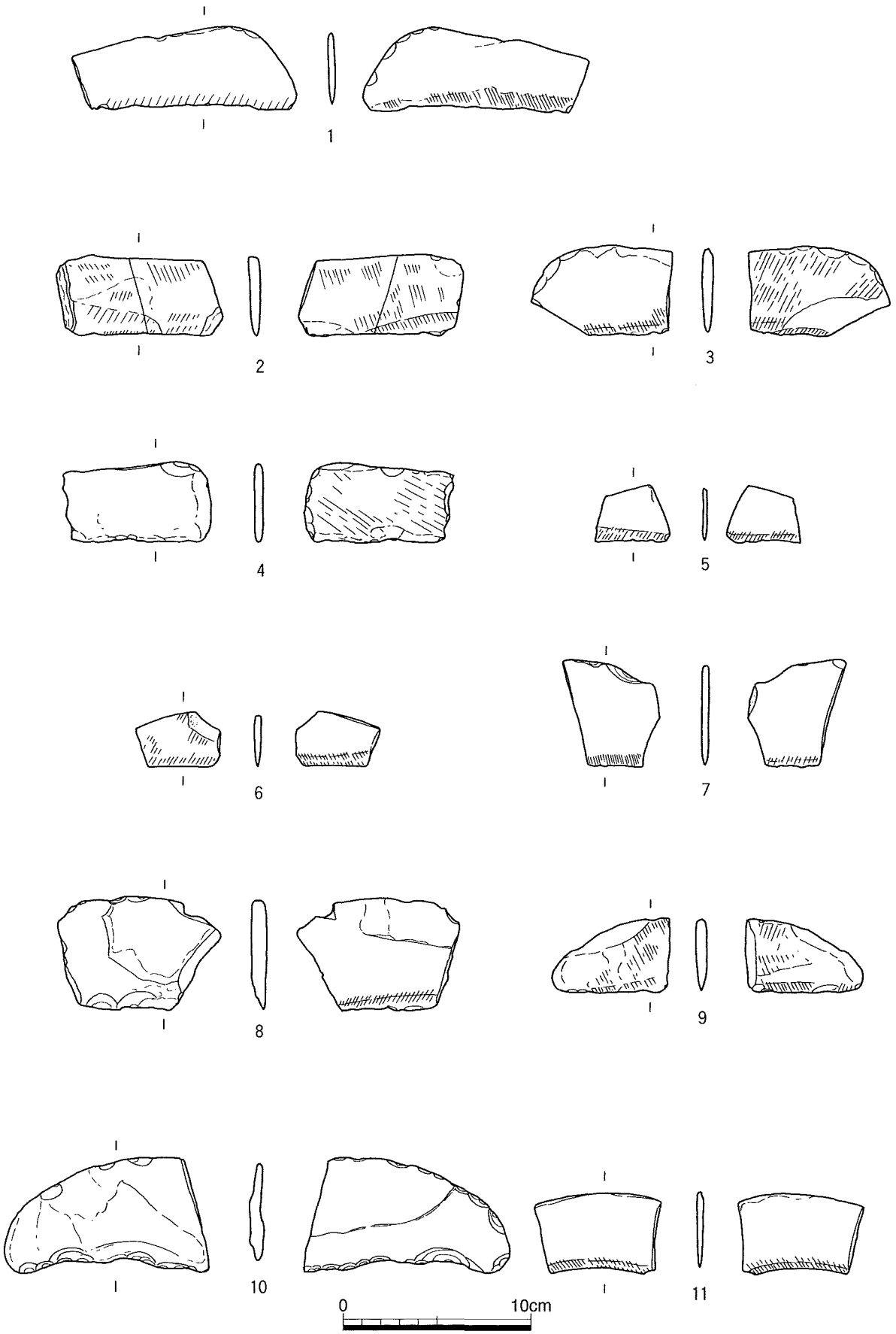


Fig25　河道跡出土石器実測図①（1／3）

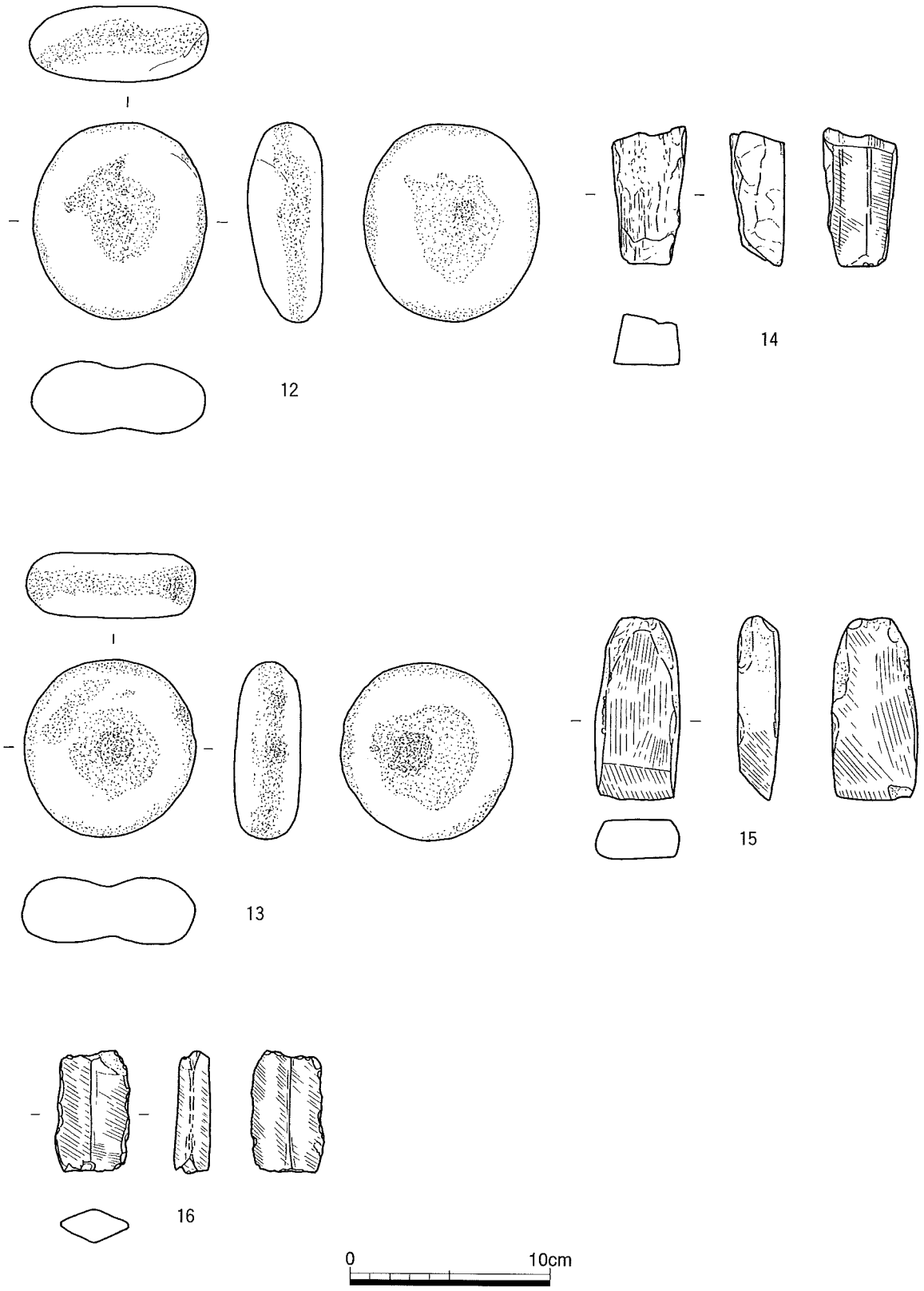


Fig26　河道跡出土石器実測図②（1／3）

報告番号	調査地	遺構	層位	色調番号（表）	色調番号（裏）	胎土	器種	残存部位	調整手法	備考
1	A②	河道跡	16層	2.5YR4/6赤褐	2.5YR4/6赤褐	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	
2	A②	河道跡	16層	2.5YR3/2暗赤褐	2.5YR4/4褐	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ	
3	A②	河道跡	16層	5YR6/6橙	10YR6/3にぶい黄橙	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	鉱物微量
4	A②	河道跡	16層	2.5YR5/6明赤褐	5YR5/6明赤褐	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ	
5	A②	河道跡	16層	7.5YR5/4にぶい褐	7.5YR6/6橙	長石・石英	甕	口縁破片		
6	A②	河道跡	16層	5YR5/8明赤褐	5YR5/8明赤褐	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	
7	A②	河道跡	16層	2.5YR3/2暗赤褐	2.5YR4/6赤褐	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	
8	A②	河道跡	16層	7.5YR5/4にぶい褐	10YR4/3にぶい黄褐	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	
9	A②	河道跡	16層	5YR5/4にぶい赤褐	5YR4/4にぶい赤褐	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	
10	A②	河道跡	16層	7.5YR4/3褐	7.5YR5/3にぶい褐	長石・石英	甕	口縁破片		
11	A②	河道跡	16層	2.5YR4/4にぶい赤褐	2.5YR4/6赤褐	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	
12	A②	河道跡	16層	7.5YR6/6橙	7.5YR7/6橙	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	
13	A②	河道跡	16層	7.5YR6/3にぶい褐	5YR6/6橙	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	
14	A②	河道跡	16層	2.5YR6/6橙	7.5YR7/4にぶい橙	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	
15	A②	河道跡	16層	7.5YR3/1黒褐	2.5YR3/2黒褐	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ・タテハケメ	
16	A②	河道跡	16層	5YR5/6明赤褐	2.5YR4/8赤褐	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	
17	A②	河道跡	16層	2.5YR6/6橙	2.5YR6/6橙	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	
18	A②	河道跡	16層	7.5YR4/4褐	2.5YR4/3褐	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ・タテハケメ　裏:ヨコナデ	鉱物微量
19	A②	河道跡	16層	10YR5/3にぶい黄褐	7.5YR5/4にぶい褐	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ	
20	A②	河道跡	16層	5YR3/3暗赤褐	5YR3/3暗赤褐	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	
21	A②	河道跡	16層	5YR6/6橙	5YR6/5橙	長石・石英	甕	口縁破片	裏:ヨコナデ	
22	A②	河道跡	16層	5YR5/4にぶい赤褐	5YR6/6橙	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	
23	A②	河道跡	16層	5YR5/6明赤褐	7.5YR5/4にぶい褐	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ	
24	A②	河道跡	16層	7.5YR6/6橙	7.5YR6/6橙	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ	
25	A②	河道跡	16層	5YR5/6明赤褐	7.5YR6/6橙	長石・石英	甕	口縁破片		
26	A②	河道跡	16層	5YR5/6明赤褐	5YR6/6橙	長石・石英	甕	口縁破片		
27	A②	河道跡	16層	5YR5/3にぶい赤褐	7.5YR6/4にぶい橙	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ	
28	A②	河道跡	16層	2.5YR5/6明赤褐	2.5YR5/4にぶい赤褐	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	
29	A②	河道跡	16層	5YR5/6明赤褐	5YR6/6橙	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ	
30	A②	河道跡	16層	5YR7/8橙	5YR6/6橙	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	
31	A②	河道跡	16層	7.5YR7/4にぶい橙	2.5YR7/4にぶい橙	長石・石英	甕	口縁破片		
32	A②	河道跡	16層	5YR4/6赤褐	5YR5/8明赤褐	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ	
33	A②	河道跡	16層	7.5YR6/6橙	5YR6/8橙	長石・石英	甕	口縁破片		
34	A②	河道跡	16層	2.5YR6/6橙	5YR6/4にぶい橙	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	鉱物微量
35	A②	河道跡	16層	7.5YR5/4にぶい褐	10YR5/3にぶい赤褐	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	
36	A②	河道跡	16層	2.5YR5/8明赤褐	5YR5/6明赤褐	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	
37	A②	河道跡	16層	10YR5/4にぶい黄褐	10YR6/4にぶい黄褐	長石・石英	甕	口縁破片	表:タテハケメ	
38	A②	河道跡	16層	5YR6/3橙	5YR6/3橙	長石・石英	甕	口縁破片		
39	A②	河道跡	16層	10YR5/4にぶい黄褐	7.5YR5/4にぶい褐	長石・石英	甕	口縁破片		
40	A②	河道跡	16層	5YR5/4にぶい赤褐	5YR6/6橙	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ・タテハケメ　裏:ヨコナデ	
41	A②	河道跡	16層	7.5YR5/4にぶい褐	7.5YR5/6明褐	長石・石英	甕	口縁破片		
42	A②	河道跡	16層	7.5YR7/4にぶい橙	10YR7/3にぶい黄橙	長石・石英	甕	口縁破片		
43	A②	河道跡	16層	7.5YR5/4にぶい褐	5YR6/6橙	長石・石英	甕	口縁破片		
44	A②	河道跡	16層	5YR5/6明赤褐	7.5YR5/4にぶい褐	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	
45	A②	河道跡	16層	2.5YR5/6明赤褐	2.5YR5/6明赤褐	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ	
46	A②	河道跡	16層	5YR6/4にぶい橙	7.5YR7/3にぶい橙	長石・石英	甕	口縁破片	表:タテハケメ	
47	A②	河道跡	16層	7.5YR6/4にぶい橙	5YR6/6橙	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ	鉱物微量
48	A②	河道跡	16層	10YR6/3にぶい黄橙	10YR6/3にぶい黄橙	長石・石英	甕	口縁破片	裏:ヨコナデ	
49	A②	河道跡	16層	10R6/8赤橙	2.5YR7/6橙	長石・石英	甕	口縁破片		鉱物微量
50	A②	河道跡	16層	10YR5/3にぶい黄褐	10YR6/4にぶい黄褐	長石・石英	甕	口縁破片	表:タテハケメ　裏:ヨコナデ	鉱物微量
51	A②	河道跡	16層	7.5YR6/6橙	5YR5/6明赤褐	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	
52	A②	河道跡	16層	5YR5/8明赤褐	5YR5/6明赤褐	長石・石英	甕	口縁破片	裏:ヨコナデ	
53	A②	河道跡	16層	5YR5/6明赤褐	7.5YR5/6明褐	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	
54	A②	河道跡	16層	7.5YR5/4にぶい褐	7.5YR6/6橙	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	
55	A②	河道跡	16層	7.5YR4/6褐	7.5YR6/6橙	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ	
56	A②	河道跡	16層	5YR5/6明赤褐	5YR6/6橙	長石・石英	甕	口縁破片	表:タテハケメ	
57	A②	河道跡	16層	10YR6/3にぶい黄橙	10YR6/3にぶい黄橙	長石・石英	甕	口縁破片		
58	A②	河道跡	16層	10YR6/3にぶい黄橙	10YR6/4にぶい黄褐	長石・石英	甕	口縁破片		
59	A②	河道跡	16層	7.5YR6/6橙	7.5YR7/6橙	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	
60	A②	河道跡	16層	5YR4/6赤褐	7.5YR5/6明褐	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ	
61	A②	河道跡	16層	7.5YR5/6明褐	5YR6/6橙	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ	
62	A②	河道跡	16層	7.5YR5/4にぶい褐	7.5YR6/6橙	長石・石英	甕	口縁破片		
63	A②	河道跡	16層	7.5YR7/6橙	10YR6/6明黄褐	長石・石英	甕	口縁破片		
64	A②	河道跡	16層	2.5YR4/6赤褐	2.5YR4/8赤褐	長石・石英	甕	口縁破片		
65	A②	河道跡	16層	5YR6/6橙	7.5YR7/6橙	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	
66	A②	河道跡	16層	10YR4/1褐灰	2.5YR4/1黄灰	長石・石英	壺	口縁破片		
67	A②	河道跡	16層	7.5YR6/6橙	7.5YR6/6橙	長石・石英	壺	口縁破片		
68	A②	河道跡	16層	5YR5/6明赤褐	7.5YR6/6橙	長石・石英	壺	口縁破片		
69	A②	河道跡	16層	7.5YR7/6橙	7.5YR7/4にぶい橙	長石・石英	壺	口縁破片		鉱物微量
70	A②	河道跡	16層	5YR6/6橙	5YR6/6橙	長石・石英	壺	口縁破片		口唇部刻目
71	A②	河道跡	16層	5YR7/4にぶい橙	5YR7/6橙	長石・石英	高坏	脚部破片		丹塗痕跡
72	A②	河道跡	16層	10YR7/6明黄褐	10YR7/4にぶい黄褐	長石・石英	高坏	口縁破片		丹塗痕跡
73	A②	河道跡	16層	10YR8/2灰白	10YR8/2灰白	長石・石英	高坏	坏部破片		
74	A②	河道跡	16層	5YR7/6橙	10YR3/1黒褐	長石・石英	甕	底部破片	表:タテハケメ	内面スス痕
75	A②	河道跡	16層	2.5YR6/6橙	10YR5/3にぶい赤褐	長石・石英	甕	底部破片	表:タテハケメ	
76	A②	河道跡	16層	7.5YR7/8黄橙	7.5YR6/6橙	長石・石英	甕	底部破片		
77	A②	河道跡	16層	5YR6/6橙	5YR6/4にぶい橙	長石・石英	甕	底部破片		
78	A②	河道跡	16層	7.5YR5/6明褐	7.5YR5/4にぶい褐	長石・石英	甕	底部破片		
79	A②	河道跡	16層	2.5YR5/6明赤褐	10YR4/3にぶい黄褐	長石・石英	甕	底部破片	表:タテハケメ	
80	A②	河道跡	16層	5YR6/6橙	10YR4/2灰黄褐	長石・石英	甕	底部破片	表:タテハケメ	
81	A②	河道跡	16層	7.5YR6/4にぶい橙	7.5YR5/2灰褐	長石・石英	甕	底部破片	表:タテハケメ	
82	A②	河道跡	16層	2.5YR6/6橙	10YR4/1褐灰	長石・石英	壺	底部破片		
83	A②	河道跡	16層	7.5YR6/6橙	7.5YR6/6橙	長石・石英	壺	底部破片		
84	A②	河道跡	16層	5YR6/8橙	5YR5/8明赤褐	長石・石英	甕指	口縁破片		
85	A②	河道跡	13層	5YR6/6橙	10R4/8赤	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ	
86	A②	河道跡	13層	5YR5/6明赤褐	2.5YR4/6赤褐	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ	
87	A②	河道跡	13層	7.5YR6/3にぶい褐	7.5YR6/4にぶい橙	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ	
88	A②	河道跡	13層	5YR5/6明赤褐	7.5YR5/6明褐	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ	
89	A②	河道跡	13層	7.5YR5/4にぶい褐	7.5YR5/6明褐	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ	
90	A②	河道跡	13層	7.5YR5/6明褐	7.5YR6/6橙	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ	
91	A②	河道跡	13層	2.5YR4/6赤褐	7.5YR4/3褐	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	
92	A②	河道跡	13層	7.5YR4/6褐	7.5YR4/3褐	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	
93	A②	河道跡	13層	7.5YR4/2灰褐	7.5YR6/6橙	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	
94	A②	河道跡	13層	5YR5/6明赤褐	7.5YR6/8橙	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	
95	A②	河道跡	13層	7.5YR6/4にぶい橙	7.5YR6/6橙	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	鉱物微量
96	A②	河道跡	13層	2.5YR4/6赤褐	2.5YR3/6暗赤褐	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ	
97	A②	河道跡	13層	2.5YR6/8橙	2.5YR5/8明赤褐	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	
98	A②	河道跡	13層	5YR6/6橙	7.5YR6/4にぶい橙	長石・石英	甕	口縁破片	裏:ヨコナデ	
99	A②	河道跡	13層	2.5YR6/8橙	2.5YR6/6橙	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	
100	A②	河道跡	13層	5YR6/8橙	5YR5/6明赤褐	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	鉱物微量
101	A②	河道跡	13層	10YR7/4にぶい黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	
102	A②	河道跡	13層	5YR5/4にぶい赤褐	5YR4/4にぶい赤褐	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ	

Tab 9　河道跡出土土器観察表①

報告番号	調査区	遺構	層位	色調番号（表）	色調番号（裏）	胎土	器種	残存部位	調整手法	備考
103	A②	河道跡	13層	7.5YR6/6橙	7.5YR5/4にぶい褐	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	鉱物微量
104	A②	河道跡	13層	7.5YR5/6明褐	7.5YR4/2灰褐	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	
105	A②	河道跡	13層	5YR5/4にぶい赤褐	7.5YR6/4にぶい橙	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	
106	A②	河道跡	13層	5YR2/2暗赤褐	5YR4/4にぶい赤褐	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	
107	A②	河道跡	13層	5YR5/6明赤褐	5YR6/6橙	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ・タテハケメ	
108	A②	河道跡	13層	5YR6/8橙	5YR5/6明赤褐	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	
109	A②	河道跡	13層	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR6/6橙	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	鉱物微量
110	A②	河道跡	13層	10YR4/4褐	10YR4/3にぶい黄褐	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	
111	A②	河道跡	13層	10YR6/3にぶい黄橙	10YR6/4にぶい黄褐	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	鉱物微量
112	A②	河道跡	13層	5YR6/6橙	7.5YR7/4にぶい橙	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	
113	A②	河道跡	13層	5YR5/4にぶい赤褐	5YR6/6橙	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ・タテハケメ	
114	A②	河道跡	13層	10YR6/6明黄褐	10YR6/4にぶい黄褐	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	鉱物微量
115	A②	河道跡	13層	7.5YR5/3にぶい褐	5YR7/6橙	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	
116	A②	河道跡	13層	5YR6/4にぶい橙	5YR5/3にぶい赤褐	長石・石英	甕	口縁破片		
117	A②	河道跡	13層	5YR6/6橙	5YR6/6橙	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	
118	A②	河道跡	13層	7.5YR6/6橙	2.5YR5/2暗灰黄	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	
119	A②	河道跡	13層	5YR4/4にぶい赤褐	7.5YR3/2黒褐	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	
120	A②	河道跡	13層	2.5YR4/4にぶい赤褐	2.5YR4/8赤褐	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	
121	A②	河道跡	13層	7.5YR6/3にぶい褐	7.5YR7/4にぶい橙	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	鉱物微量
122	A②	河道跡	13層	5YR5/6明赤褐	5YR5/6明赤褐	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	
123	A②	河道跡	13層	5YR5/6明赤褐	5YR5/6明赤褐	長石・石英	壺	口縁破片	表:暗紋	
124	A②	河道跡	13層	5YR5/6明赤褐	5YR5/6明赤褐	長石・石英	壺	口縁破片	表:ヨコナデ	
125	A②	河道跡	13層	5YR5/6明赤褐	5YR5/6明赤褐	長石・石英	壺	口縁破片	表:ヨコナデ	
126	A②	河道跡	13層	10YR5/2灰黄褐	2.5YR4/1黄灰	長石・石英	甕	底部破片		
127	A②	河道跡	13層	7.5YR6/6橙	7.5YR6/6橙	長石・石英	甕	底部破片		
128	A②	河道跡	13層	5YR5/8明赤褐	2.5YR5/8明赤褐	長石・石英	甕	底部破片		
129	A②	河道跡	13層	5YR6/6橙	7.5YR4/1褐灰	長石・石英	甕	底部破片	表:タテハケメ	
130	A②	河道跡	13層	7.5YR5/4にぶい褐	7.5YR2/1黒	長石・石英	甕	底部破片	表:タテハケメ	
131	A②	河道跡	13層	2.5YR5/6明赤褐	7.5YR5/2灰褐	長石・石英	甕	底部破片	表:タテハケメ	
132	A②	河道跡	13層	5YR6/6橙	10YR5/3にぶい赤褐	長石・石英	甕	底部破片		
133	A②	河道跡	13層	5YR6/6橙	5YR6/8橙	長石・石英	甕	底部破片		
134	A②	河道跡	13層	2.5YR6/8橙	5YR3/3暗赤褐	長石・石英	甕	底部破片		
135	A②	河道跡	13層	2.5YR5/8明赤褐	2.5YR5/6明赤褐	長石・石英	甕棺	口縁破片		
136	A②	河道跡	13層	10YR7/4にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄褐	長石・石英	甕棺	口縁破片		
137	A②	河道跡	12層	7.5YR6/4にぶい橙	7.5YR6/6橙	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	
138	A②	河道跡	12層	5YR7/6橙	7.5YR7/4にぶい橙	長石・石英	甕	口縁破片		
139	A②	河道跡	12層	7.5YR5/4にぶい褐	7.5YR5/4にぶい褐	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ	
140	A②	河道跡	12層	5YR4/3にぶい赤褐	5YR5/6明赤褐	長石・石英・角閃石	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	
141	A②	河道跡	12層	2.5YR3/2暗赤褐	2.5YR4/4褐	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	
142	A②	河道跡	12層	2.5YR6/2灰黄	2.5YR6/2灰黄	長石・石英	甕	口縁破片		
143	A②	河道跡	12層	2.5YR6/4にぶい橙	5YR6/6橙	長石・石英	甕	口縁破片		
144	A②	河道跡	12層	2.5YR5/6明赤褐	2.5YR4/6赤褐	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	
145	A②	河道跡	12層	2.5YR6/6橙	5YR6/6橙	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	
146	A②	河道跡	12層	7.5YR6/6橙	2.5YR5/6明赤褐	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	
147	A②	河道跡	12層	2.5YR5/6明赤褐	5YR5/6明赤褐	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ	丹塗痕跡
148	A②	河道跡	12層	5YR5/4にぶい赤褐	7.5YR5/4にぶい褐	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	
149	A②	河道跡	12層	5YR6/6橙	2.5YR6/8橙	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	
150	A②	河道跡	12層	2.5YR4/2灰赤	5YR5/3にぶい赤褐	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	
151	A②	河道跡	12層	7.5YR6/6橙	7.5YR6/6橙	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	
152	A②	河道跡	12層	5YR5/8明赤褐	10YR5/4にぶい黄褐	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	
153	A②	河道跡	12層	2.5YR5/6明赤褐	2.5YR6/6橙	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	
154	A②	河道跡	12層	5YR6/6橙	7.5YR6/6橙	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	
155	A②	河道跡	12層	2.5YR5/6明赤褐	5YR6/6橙	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	
156	A②	河道跡	12層	2.5YR5/6明赤褐	5YR6/6橙	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	
157	A②	河道跡	12層	2.5YR6/8橙	5YR6/8橙	長石・石英	甕	口縁破片	表:ヨコナデ	
158	A②	河道跡	12層	10R5/8赤	10R3/1暗赤灰	長石・石英	壺	口縁破片	表:ヨコナデ	
159	A②	河道跡	12層	5YR6/6橙	5YR6/8橙	長石・石英	壺	口縁破片		
160	A②	河道跡	12層	5YR5/6明赤褐	10YR5/4にぶい黄褐	長石・石英	壺	口縁破片		
161	A②	河道跡	12層	5YR5/4にぶい赤褐	5YR6/4にぶい橙	長石・石英	甕	底部破片	表:タテハケメ	
162	A②	河道跡	12層	7.5YR5/4にぶい褐	2.5YR4/4褐	長石・石英	甕	底部破片	表:タテハケメ	
163	A②	河道跡	12層	5YR7/4にぶい橙	10YR5/3にぶい赤褐	長石・石英	甕	底部破片	表:タテハケメ	
164	A②	河道跡	12層	2.5YR5/8明赤褐	2.5YR3/1暗赤灰	長石・石英	甕	底部破片		
165	A②	河道跡	12層	2.5YR6/6橙	10YR8/3浅黄橙	長石・石英	甕	底部破片		
166	A②	河道跡	12層	5YR5/8明赤褐	7.5YR6/4にぶい橙	長石・石英	壺	底部破片	表:タテハケメ	
167	A②	河道跡	12層	2.5YR4/6赤褐	2.5YR3/1暗赤灰	長石・石英	壺	底部破片		

Tab10　河道跡出土土器観察表②

報告番号	調査区	遺構	層位	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	器種	石材	備考
1	A②	河道跡	16層	120	45	4	30.7	石鏃	頁岩質砂岩	
2	A②	河道跡	13層	88	44	7	42.7	石鏃	頁岩質砂岩	背面を平坦に加工
3	A②	河道跡	13層	76	49	6	33.6	石鏃	頁岩質砂岩	
4	A②	河道跡	16層	80	48	5	36.8	石鏃	頁岩質砂岩	
5	A②	河道跡	13層	40	31	3	6	石鏃	頁岩質砂岩	
6	A②	河道跡	16層	46	30	4	7.5	石鏃	頁岩質砂岩	背面を平坦に加工
7	A②	河道跡	16層	52	53	4	19.7	石鏃	頁岩質砂岩	
8	A②	河道跡	13層	87	61	9	67.7	石鏃	頁岩質砂岩	背面を平坦に加工
9	A②	河道跡	13層	64	40	6	18.2	石鏃	頁岩質砂岩	
10	A②	河道跡	16層	110	62	8	72.3	石鏃	頁岩質砂岩	打製石鏃か
11	A②	河道跡	16層	68	44	4	17.9	石鏃	頁岩質砂岩	
12	A②	河道跡	13層	100	88	37	554.6	敲石	玄武岩	
13	A②	河道跡	13層	90	87	33	448.8	敲石	玄武岩	
14	A②	河道跡	13層	70	37	27	110.8	石斧	珪質層灰岩	
15	A②	河道跡	13層	93	43	22	15.9	石斧	頁岩質砂岩	
16	A②	河道跡	16層	62	38	18	55.1	石剣	頁岩	

Tab11　河道跡出土石器観察表

2．B 調 査 地

(1) 調査地の概要

①**所在地**：壱岐市石田町石田西触字原ノ久保324-1

②**調査地面積**：357.8㎡

③**調査地現況**

B調査地は県道勝本石田線と町道江里線の交差点角の住宅地跡に隣接する田畑地である。調査区を①～③区に区分している。調査地南西の水田ではH８範囲確認調査〔**宮崎1999**〕が行われている。弥生時代中期の土器片が３点出土しているが，遺構は検出されていない。また，調査地北東の住居跡地ではH16県道調査〔**林2006**〕において東西軸の溝状遺構が確認されている。

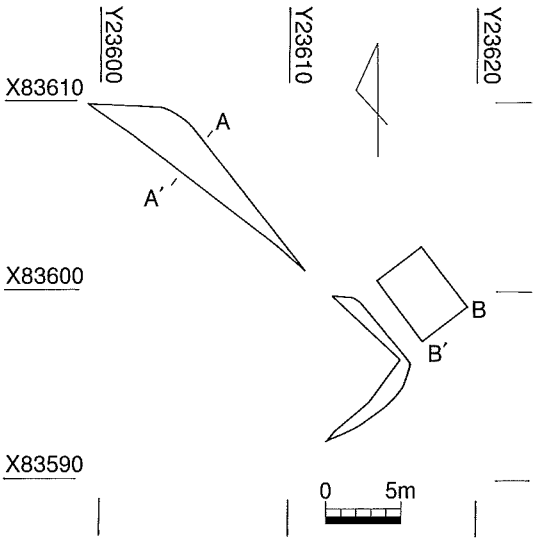


Fig27　B調査地平面図（1/400）

(2) 基本層序 (Fig27A-A'→Fig 28，Fig 27 B-B' → Fig 29，Tab 12～13)

①区は１～２層の水田耕作土層，３～４層の自然堆積層，５層の弥生時代包含層，６層の弥生時代生活面からなる。③区は１層の旧耕作土層，２層の造成層，３層の基盤層からなる。

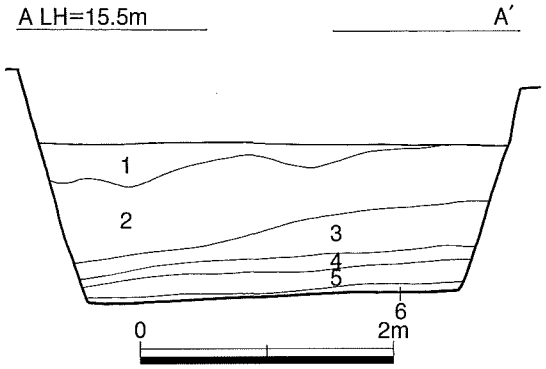


Fig28　B調査地①区土層図（1/60）

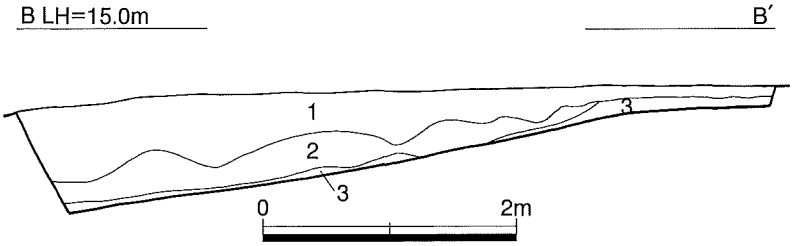


Fig29　B調査地③区土層図（1/60）

番号	土色質	注記	備考
1層	―	―	耕作土層
2層	―	―	耕作土層
3層	暗灰褐色粘質土層	遺物片が含まれるが少量。東側に緩やかに傾斜	
4層	黒褐色土層	やや粘質で混入物の少ない純粋な有機質土壌。	
5層	淡灰黄色粘質土層	弥生時代包含層と考えられるが，遺物量は少ない。	弥生時代包含層か
6層	明黄色粘質土層	上面が弥生時代の生活面と考えられる。	弥生時代生活面か
7層	―	―	表土層
8層	淡黄灰色土層	造成土であるが硬く締まる。混入物は少ない。	
9層	明黄色粘質土層	所々礫も露出しており，基盤と思われる。	基盤層か

Tab12　B調査地①区土層観察表

番号	土色質	注記	備考
1層	―	―	表土層
2層	淡黄灰色土層	造成土であるが硬く締まる。混入物は少ない。	
3層	明黄色粘質土層	所々礫も露出しており，基盤と思われる。	基盤層か

Tab13　B調査地③区土層観察表

(3) 遺構・遺物

3調査区とも明確に遺構と判断されるプランは確認されなかった。耕作土層および包含層から弥生土器片135点，陶磁器12点などが出土したが，摩滅した破片のみであったため図化は省略した。

Pho 4　B調査地①区土層断面（北から）

Pho 5　B調査地③区土層断面（北から）

3．C 調 査 地

(1) 調査地の概要

①所在地：壱岐市石田町石田西触字原ノ久保330-1

②調査地面積：388.6m²

③調査地現況

C調査地は県道勝本石田線に隣接する畑地に位置する。調査区を①～③区に区分している。調査地西ではH８範囲確認調査〔**宮崎1999**〕が行われ，D区より石棺墓12基，石蓋土壙墓５基，土壙墓１基，甕棺墓２基の計20基の墳墓が検出されるとともに，後漢鏡や仿製鏡，勾玉などの重要遺物が出土している。

(2) 基本層序 (Fig30A-A'→Fig31, Tab14)

１～２層の畑地耕作土層，３層の古代包含層，４層の弥生時代包含層，５層の弥生時代生活面からなる。

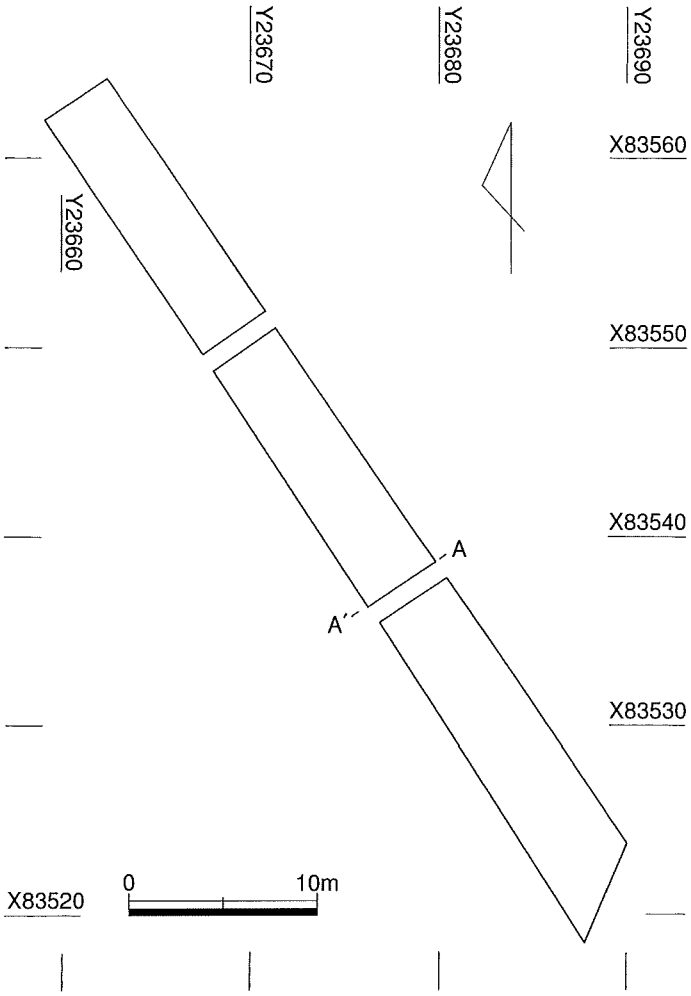


Fig30　C調査地平面図（１/400）

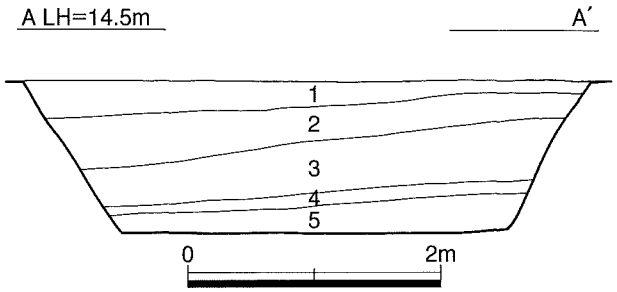


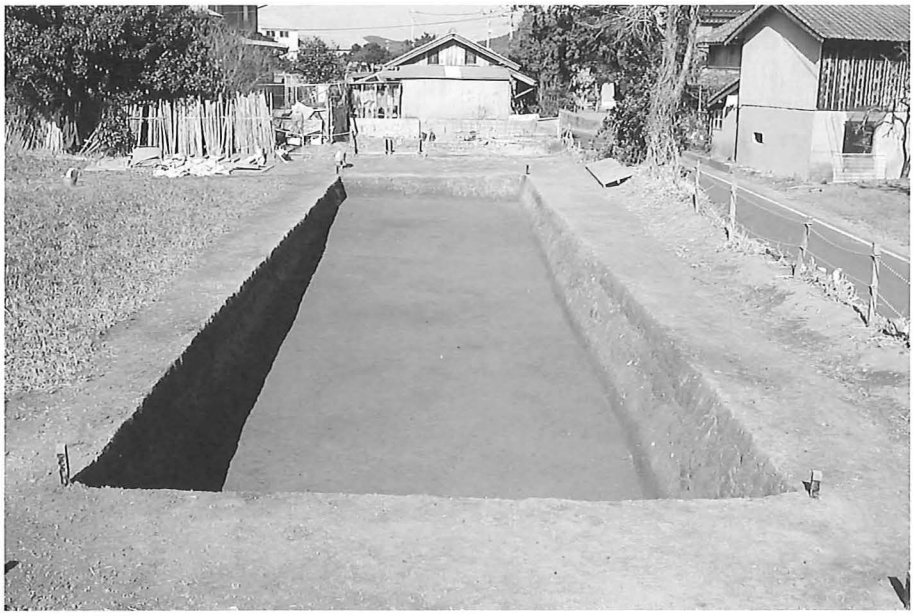
Fig31　C調査地土層図（１/60）

番号	土色質	注記	備考
１層	―	―	耕作土層
２層	―	―	耕作土層
３層	黒褐色粘質土層	かなり締まった粘質を帯びた土層。古代を中心とする包含層と考えられ，土器片や土師器片を含む。層位は厚く，やや東側に傾斜する。	古代包含層
４層	茶褐色粘質土層	極めて粘質が強く混入物もない。弥生時代の包含層と考えられ，土器片を含む。３～５層の漸移層か。	弥生時代包含層
５層	明黄褐色粘質土層	粘質が強く遺物を含まない。この調査地では遺構は確認されなかった。	弥生時代生活面

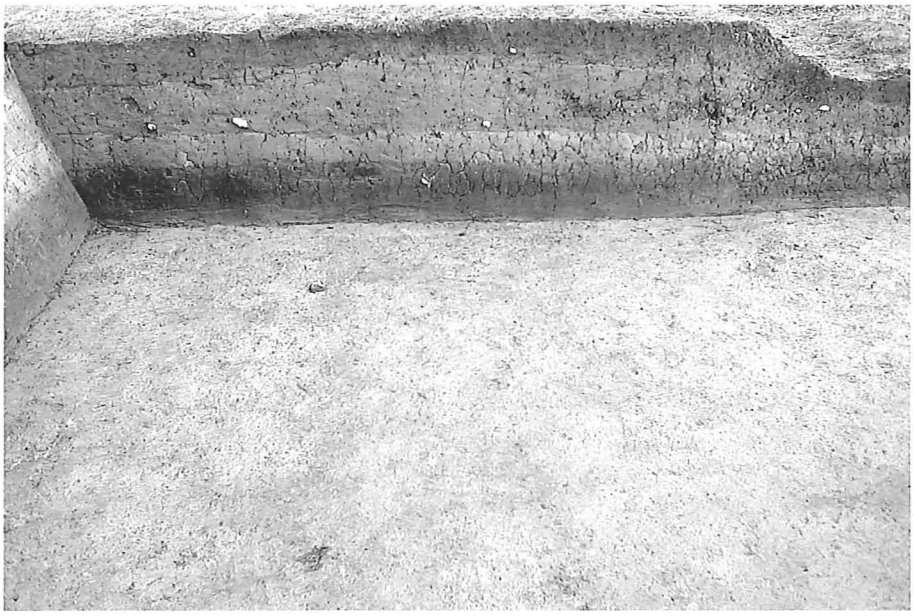
Tab14　C調査地土層観察表

(3) 遺構・遺物

3調査区とも明確に遺構と判断されるプランは確認されなかった。耕作土層および包含層から弥生土器片347点，陶磁器22点，石器片1点などが出土したが，摩滅した破片のみであったため図化は省略した。



Pho 6　C調査地①区遺構確認面（南から）



Pho 7　C調査地③区東側土層断面（西から）

Ⅳ章　本調査の総括

1．A 調 査 地

(1) 河道跡

①遺構

河道跡について土層および遺構軸，さらには現況地形から検討する。この遺構がＨ７圃場整備調査〔**山下・川口1997**〕における大溝の北西延長部分であることは確実と思われる。しかし大溝と異なり，河道跡は南側河岸における急峻な立ち上がりに特徴がある。これが流水による浸食作用の結果なのか，あるいは人工的な掘削によるものなのかは判断が難しい。基盤層の土層断面にテラス状の平坦面がある点や，掘削した廃土による版築のような層位がある点（Fig18：17層）などから，人為的な掘削である可能性も否定できない。遺構充填土の珪藻分析からは水流の淘汰作用が考えられるが，一方では乾燥した環境にあったとも考えられ，いわば「空堀」的な様相も想像される。

仮に水量が多く，流れの急な河道であったとすれば，現況地形からは北から大きく西に迂回して河道跡，大溝とつながる「Ｓ字」を描くような流れであったと判断せざるを得ない。河道跡の北側で４条確認された溝状遺構はそのような流れを示すようにも見える。またテラス状の平坦面は，河道が一旦埋没した後（13層，15層，16層の堆積）に流路が変わり，水流の浸食作用によって新たに基盤層（19層）が削られたとも考えられる。つまり，時期の異なる２つの河道跡の痕跡が土層に投影されていると判断する場合である。

一方，「Ｓ字」に迂回する河道ではなく，大溝から河道跡へ流れる軸でそのまま北西に延びるのであれば，やがて遺跡北部丘陵へ上っていくことになり，自然流路とは考えにくい。この場合は人工掘削による環濠という性格を検討する必要もあるが，この遺跡北部丘陵については調査歴がないため判断材料に乏しい。

Ａ調査地北西の遺跡北部丘陵（**Fig10参照**）は，その背後に控える丘陵が舌状に南へ延びる先端部分に位置する。同じように遺跡中央部丘陵（**Fig10参照**）も遺跡南部丘陵（**Fig10参照**）が舌状に北へ延びたもので，幡鉾川を境に２つの丘陵が岬状に突出する様相をみせている。この遺跡中央部丘陵には東西に２条の環濠が掘削されていることがＨ７範囲確認調査〔**宮崎1999**〕で確認されている。いわば「堀切」のような区画濠であり，仮に遺跡北部丘陵に何らかの主要施設があれば，同様の環濠があった可能性は否定できない。調査区南東に位置する川原畑地区ではＨ６圃場整備調査〔**山下・川口1997**〕においてピットや土坑が多く確認されている。幡鉾川北岸に居住域や工房群があったとすれば，遺跡北部丘陵がこの中心地として機能していた可能性は高い。

②出土遺物

次に遺構出土の遺物について検討する。出土層位は12層，13層，16層に集中し，上層になるにつれ出土数が減少する。土器はすべて破片で，接合する個体も少ない。口径復元できるものも少なく，全体のプロポーションが把握できるものもない。出土土器片の傾向としては甕が251点と，その比率（90.6%）が極めて高いことが注目される。一方，壺は24点（8.7%），高坏は２点（0.7%）にとどまる。また甕棺材と思われる大型甕が３点出土している。

遺物の出土状況から河道跡の性格について検討を進めるため，出土量の多い甕の口縁部破片を４つの属性に分類した。

Ⅰ類…口縁断面が「三角」型となるもの（Fig19：１～10，Fig22：85～89，Fig24：137～141）

Ⅱ類…口縁断面が「コ字」型で口縁部が内傾するもの（Fig19：11～26，Fig22：90～96，Fig24：142～145）

Ⅲ類…口縁断面が「コ字」型で口縁部が水平なもの（Fig20：27～59，Fig22：97～116，Fig24：146～150）

Ⅳ類…口縁断面が「鋤先」型で口縁部が垂れ下がるもの（Fig21：63～65，Fig23：117～122，Fig24：151～156）

型式的にⅠ→Ⅱ→Ⅲ→Ⅳの順で時間推移すると考えられる。各類型がどの時期に該当するか厳密に判断することは難しいが，この河道跡がどのような時間推移の中で堆積したかを考察するには十分な情報が得られると思われた（Tab15参照）。

傾向として，各層位ともⅢ類の比率が高い，新しい堆積ほど類型間の比率差が少なくなる，の２点が上げられる。層位間で類型比率に違いが出ることを期待したが，それは見られなかった。

同様に底部破片についても３つの属性に分類した。

Ａ類…底の凹みが大きく，底部断面の厚いもの（Fig21：74～76，Fig23：126～128，Fig24：161）

Ｂ類…底の凹みの少ない，Ａ類とＣ類の中間型（Fig21：77～79，Fig23：129～131，Fig24：162）

Ｃ類…底が平坦となり，底部断面が薄いもの（Fig21：80～83，Fig23：132～134，Fig24：163～167）

型式的にＡ→Ｂ→Ｃの順で時間推移すると考えられる。口縁部以上に各類型の時期判断は難しいが，大まかな時間推移の把握は可能である。全体の傾向としてＣ類の比率が高いことが上げられるが，13層が各類型とも同じような出土比率で異なる（Tab16参照）。

各層位における甕形土器口縁部および底部の属性比率から，この遺構の形成および埋没の時間推移を検討することは困難である。が，川底に最も近い16層における甕形土器口縁部Ⅲ類の出土状況から，この類型期が河道跡の最稼働期，つまり最も活発に廃棄物の投棄が行われていた時期と判断されるのではないか。田崎編年における須玖Ⅰ式新段階に比定でき〔**田崎1985**〕，底部Ｃ類の出土比率との矛盾もないと思われる。またＨ７圃場整備調査における大溝出土の土器片も須玖Ⅰ式が主体であると報告されていることとも調和する。

次に石器について検討する。Ｈ７圃場整備調査では大溝や２号土壙，13号土壙から石器片が出土しており，この地区周辺に石剣や石鎌，石斧類の製作工房があったことが推測されている。今回，河道跡からは石鎌片が多く出土しており，改めてこの推論を補強するものとなった。原の辻遺跡ではこれまでに約470点の石鎌が出土している。石包丁を遙かに凌駕する出土量であり，この遺跡における弥生時代の農耕活動を検討する上で重要な要素となっている。石鎌の分類は整形技術や刃部形態，さらに基部形態などをもとに行われてきた〔**藤田1964，松尾1984**〕。今回は基部形状および刃部形状について属性分類を行った（Tab17参照）。

基部形状

鈍角…背面と基部側面の角度が鈍角であるもの

直角…背面と基部側面の角度が直角に近いもの

鋭角…背面と基部側面の角度が鋭角であるもの

刃部形状

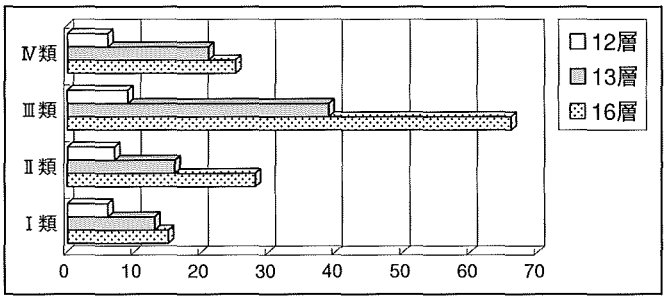
直線刃…刃部が直線となるもの

内湾刃…刃部が内湾するもの

基部形状については不明なものが約半数あるが，やや鈍角なものが多い。中尾篤志は鈍角および鋭角となるものを穀物（特にコムギ・ヒエなどの雑穀類）の収穫具，直角となるものを現代の鉈鎌的な機能を有するものと推測している〔**中尾2005**〕。刃部形状は直線となるものが8割を占める。同じく中尾は，基部鈍角の大型（全長20cm以上）から中型（全長15～20cm），基部直角の多くに直線刃が多く認められるとしている。なお刃部加工で未加工としたものは，打製刃部か未加工か判断ができないものを含んでいる。

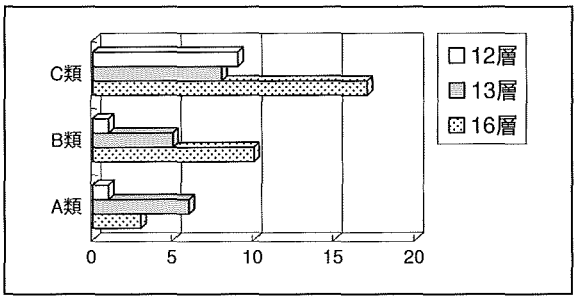
層位	Ⅰ類	Ⅱ類	Ⅲ類	Ⅳ類	
16層	15 11.2%	28 20.9%	66 49.3%	25 18.7%	134
13層	13 14.6%	16 18.0%	39 43.8%	21 23.6%	89
12層	6 21.4%	7 25.0%	9 32.1%	6 21.4%	28
					251

Tab15　河道跡出土甕口縁部類型別集計表



層位	A類	B類	C類	
16層	3 10.0%	10 33.3%	17 56.7%	30
13層	6 31.6%	5 26.3%	8 42.1%	19
12層	1 9.1%	1 9.1%	9 81.8%	11
				60

Tab16　河道跡出土底部類型別集計表



報告番号	基部形状	刃部形状	刃部加工
1	鈍角	直線	両刃
2	鈍角	直線	両刃
3	鈍角	直線	両刃
4	直角	直線	未加工
5	直角	直線	両刃
6	不明	直線	両刃
7	不明	直線	両刃
8	不明	直線	両刃
9	不明	直線	両刃
10	不明	内湾	未加工
11	不明	内湾	両刃

Tab17　河道跡出土石鎌形状別集計表

ところで，河道跡のような“流れ”のあった，あるいはあったと思われる遺構の時期，例えば自然の流れであれば廃棄場として使われた時期，環濠（環溝）であれば掘削された時期ということになるのだが，このように遺構が形成された時期の判断と，そこから出土する遺物の時期判断との整合はいかに保たれるべきであろうか。河道跡の堆積推移を考えれば，16層と12層の堆積には明らかに時間差があると思われる。今回，分類を行った属性間に時間差があるとすれば，12層から出土する遺物の主体はⅣ類であるべきだが，そのような傾向は見られない。また遺物を含む最も新しい堆積である12層にⅠ～Ⅱ類が含まれることを，単に水流の撹乱作用による下層からの混入と判断してよいだろうか。

原の辻遺跡においては環濠や河道，溝等遺構の時期判断および時間的推移が，遺跡の集落変遷を考察する際に有力な根拠となる。しかし経験的に，このような“流れ”のあった，あるいはあったと思われる遺構の構築および稼働時期を出土遺物から検討することは困難に感じる。

これまでに原の辻遺跡では多くの環濠や河道，溝等遺構の調査が行われ，報告がなされている。しかし，出土遺物の様相についての詳細な検討は行われていないのが実情であり，今後の課題となる。

2．B 調 査 地

B調査地の東側では，H16県道〔**林2006**〕A調査地において溝状遺構が確認されている。今回の調査で，溝状遺構の西側延長部分は検出されなかった。この溝状遺構は西側丘陵沿いに軸を北に向けると思われる。

3．C 調 査 地

C調査地の西側ではH８範囲確認調査〔**宮崎1999**〕D区において石棺墓など計20基の墳墓が検出されているが，今回の調査で新たな墳墓遺構の検出はなかった。

報告から，H８範囲確認調査D区のほぼ中央南北軸を境に，東側では墳墓遺構がなくなることが分かる。今回の調査で墳墓遺構が確認されなかった理由として，後世の土地改変による遺構の消失が考えられるが，確認した土層からはそのような状況は見受けられなかった。そのためH８範囲確認D区の中央南北軸で，墓域範囲が終わるのではないかと考えられる。

【参考文献】

山下英明・川口洋平（1997）『原の辻遺跡・安国寺A遺跡・安国寺B遺跡』（原の辻遺跡調査事務所報告書第１集）長崎県教育委員会

宮崎貴夫（1999）『原の辻遺跡』（原の辻遺跡調査事務所報告書第11集）長崎県教育委員会

田崎博之（1985）「須玖式土器の再検討」『史淵122号』九州大学文学部

藤田　等（1964）「大陸系石器―特に磨製石鎌について―」『日本考古学の諸問題』考古学研究会十周年記念論文集

松尾泰子（1984）「弥生時代の磨製石鎌について」『西部瀬戸内における弥生文化の研究』（山口大学人文学部考古学研究室研究報告第３集）山口大学人文学部考古学研究室

中尾篤志（2005）『原の辻遺跡総集編Ⅰ』（原の辻遺跡調査事務所調査報告書第30集）長崎県教育委員会

林　隆広（2006）『原の辻遺跡』（原の辻遺跡調査事務所調査報告書第32集）長崎県教育委員会

長崎県，原の辻遺跡県道調査Ａ調査地における珪藻分析

株式会社 古環境研究所

1．はじめに

珪藻は，珪酸質の被殻を有する単細胞植物であり，海水域や淡水域などの水域をはじめ，湿った土壌，岩石，コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は，塩分濃度，酸性度，流水性などの環境要因に応じて，それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は，当時の堆積環境を反映しており，水域を主とする古環境復原の指標として利用されている。

2．試　　料

試料は，県道調査Ａ調査地において，溝内堆積層の11層（茶褐色土層），12層（茶褐色混礫土層，弥生時代中期の包含層），13層（暗茶褐色土層）から採取された計３点である。

3．方　　法

以下の手順で，珪藻の抽出と同定を行った。

1）試料から１㎤を秤量

2）10％過酸化水素水を加え，加温反応させながら１晩放置

3）上澄みを捨て，細粒のコロイドと薬品を水洗（５～６回）

4）残渣をマイクロピペットでカバーグラスに滴下して乾燥

5）マウントメディアによって封入し，プレパラート作成

6）検鏡・計数

検鏡は，生物顕微鏡によって600～1500倍行った。計数は珪藻被殻が100個体以上になるまで行い，少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

4．結　　果

(1) 分 類 群

出現した珪藻は，真－中塩性種（海－汽水生種）１分類群，真塩性種（海生種）２分類群である。表１に分析結果を示し，出現した分類群について顕微鏡写真を示す。

〔真－中塩性種〕

Cocconeis scutellum

〔真塩性種〕

Actinocyclus sp.1，*Thalassiosira* sp.1

(2) 珪藻群集の特徴

分析の結果，11層と13層では珪藻がわずかに検出されたが，12層ではまったく検出されなかった。13層でわずかに検出された珪藻は，真－中塩性種(海－汽水生種)で海水藻場環境指標種群の *Cocconeis scutellum*，および真塩性種（海水生種）の *Actinocyclus* sp.1である。また，11層でわずかに検出された珪藻は，真塩性種（海水生種）で内湾から外洋指標種群（浮遊生）の *Thalassiosira* sp.1である。

5．珪藻分析から推定される堆積環境

珪藻分析の結果，溝内堆積層の11層～13層では珪藻がほとんど検出されないことから，堆積環境の推定は困難である。珪藻が検出されない原因としては，1）珪藻の生育に適さない乾燥した堆積環境であったこと，2）水流による淘汰を受けたこと，3）土層の堆積速度が速かったことなどが考えられるが，ここでは調査地点の立地や土層の堆積状況などから，1）の要因が大きいと考えられる。

なお，11層と13層でわずかに検出された海水生種の珪藻については，波の飛沫から空中に飛散した珪藻に由来する可能性や，塩分を含む生活排水などの流れ込みの可能性などが示唆される。

【文献】

Asai, K. &, Watanabe, T. (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relaiting to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom, 10, p.35-47.

Hustedt, F. (1937-1938) Systematische und ologishe Untersuchungen uber die DiatomeenFlora von Java, Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. Arch.Hydrobiol, Suppl.15, p.131-506.

Lowe, R. L. (1974) Environmental Requirements and pollusion tolerance of fresh-water diatoms.333 p., National Environmental Reserch. Center.

Patrick, R.eimer, C. W. (1966) The diatom of the United States, vol.1. Monographs of Natural Sciences of Philadelphia, No.13, The Academy of Natural Siences of Philadelphia, 644 p.

Patrick, R.eimer, C. W. (1975) The diatom of the United States, vol.2. Monographs of Natural Sciences of Philadelphia, No.13, The Academy of Natural Siences of Philadelphia, 213 p.

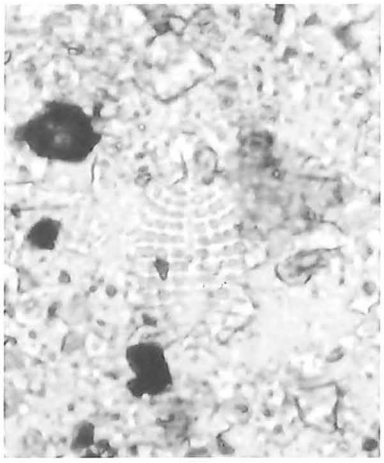
安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用．東北地理，42，p.73-88.

小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究，27，p.1-20.

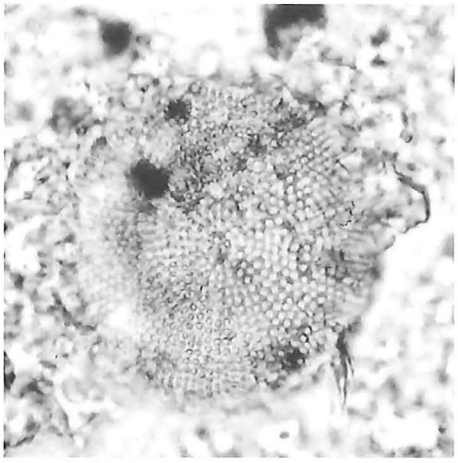
表１　原の辻遺跡における珪藻分析結果

分類群	県道調査A調査地 11層	12層	13層
真塩性種（海生種）			
Actinocyclus sp.1			1
Thalassiosira sp.1	1		
真-中塩性種（海-汽水生種）			
Cocconeis scutellum			1
合　計	1	0	1
未同定	0	0	0
破片	1	0	2
試料１cm^3中の殻数密度	2.0 $\times 10^2$	0.0	4.0 $\times 10^2$
完形殻保存率（%）	－	－	－

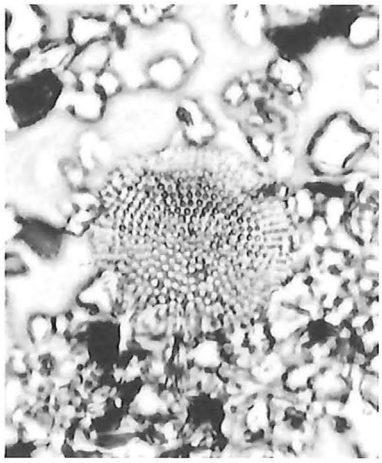
原の辻遺跡県道調査Ａ調査地の珪藻



1．*Cocconeis scutellum*



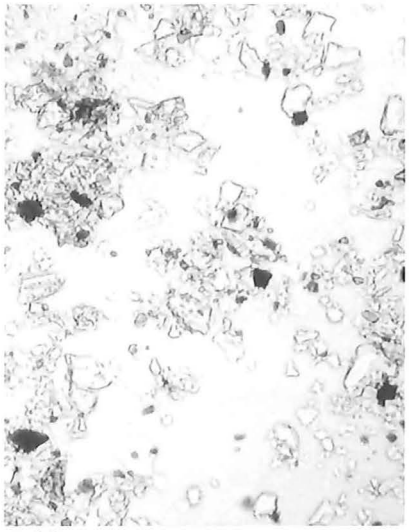
2．*Actinocyclus* sp.1



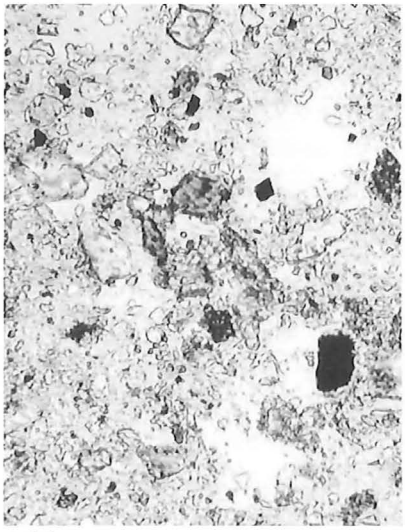
3．*Thalassiosira* sp.1

10μm

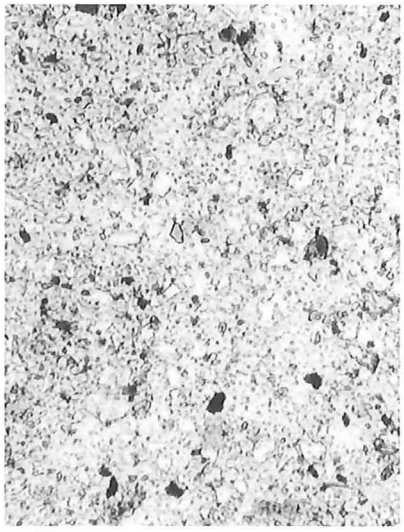
弱拡大顕微鏡写真



11層



12層



13層

10μm

報告書抄録

ふりがな	はるのつじいせき
書名	原の辻遺跡
副書名	主要地方道勝本石田線道路改良工事に伴う調査報告書
巻次	④
シリーズ名	原の辻遺跡調査事務所調査報告書
シリーズ番号	第34集
編著者名	林　隆広
編集機関	長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所
所在地	㊡811-5322　長崎県壱岐市芦辺町深江鶴亀触1092番地1　TEL0920(45)4080
発行年月日	2006年9月1日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
原の辻遺跡（はるつじいせき）	長崎県壱岐市 芦辺町・石田町	42423 42424	73-10 72-92	33°45′30″	129°45′55″	20040616 ～ 20050208	1,009m²	主要地方道勝本石田線道路改良工事

収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
原の辻遺跡	集落	弥生時代 古墳時代 古代	河道跡 溝状遺構	弥生式土器 土師器 須恵器 陶器 磁器 石器	

原の辻遺跡調査事務所調査報告書第34集

原の辻遺跡

2006. 9. 1

発行　長崎県教育委員会
長崎市江戸町2番13号

印刷　株式会社　昭和堂